2008年度　事業の概要

1 調査と研究 …… 26
飛鳥・藤原京の発掘調査 …… 26
平城京の発掘調査 …… 27
企画調整部の研究活動 …… 28
文化遺産部の研究活動 …… 28
●歴史研究室の調査と研究 …… 28
●建造物研究室の調査と研究 …… 29
●景観研究室の調査と研究 …… 30
●遺跡整備研究室の調査と研究 …… 30
埋蔵文化財センターの研究活動 …… 31
●保存修復科学研究室の調査と研究 …… 31
●環境考古学研究室の調査と研究 …… 31
●年代学研究室の調査と研究 …… 32
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究 …… 32
国際学術交流 …… 33
●中国社会科学院考古研究所との共同研究 …… 33
●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究 …… 33
●中国河南省文物考古研究所との共同研究 …… 33
●韓国国立文化財研究所との共同研究 …… 34
●西アジア諸国の文化財修復保存協力事業 …… 34
●カンボジアＡＰＳＡＲＡとの
アンコール遺跡群西トップ寺院の共同研究 …… 34
海外からの主要訪問者一覧 …… 35
海外からの招聘者一覧 …… 35
研究者の海外渡航一覧 …… 36
公開講演会 …… 39
第102回公開講演会 …… 39
第103回公開講演会 …… 39
研究集会 …… 40
科学研究費等 …… 40
学会・研究会等の活動 …… 45
文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への
指導・助言・協力等 …… 46
●平城宮跡の整備 …… 46
●高松塚古墳仮整備のための発掘調査 …… 46
●キトラ古墳出土遺物の調査研究 …… 47
発掘調査現地説明会・見学会 …… 47

2 研修・指導と教育 …… 48
埋蔵文化財担当者研修と指導 …… 48
京都大学（大学院）との連携教育 …… 48
奈良女子大学（大学院）の連携教育 …… 48

3 展示と公開 …… 50
飛鳥資料館の展示 …… 50
平城宮跡資料館の展示 …… 50
解説ボランティア事業 …… 51
図書資料・データベースの公開 …… 51

4 その他 …… 52
刊行物 …… 52
人事異動 …… 56
予算等 …… 57
職員一覧 …… 58

1 調査と研究

飛鳥・藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2008年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡４件、藤原京跡と飛鳥地域で10件である。また、2007年度からの継続調査として甘樫丘東麓遺跡の調査を４月末まで実施した。以下、主要な調査成果について概要を述べる。

藤原宮では、朝堂院朝庭の調査を実施した（第153次）。朝堂院地区では殿舎に対する継続的な調査を実施してきたが、今後は朝庭の調査を主体とし、大嘗宮の有無や下層遺構の状況を明らかにしていく予定である。今回の調査は大極殿院南門の南方に調査区を設定して実施した。その結果、礫敷（れきじき）広場を良好な状況で検出するとともに、幢竿（どうかん）支柱と考えられる柱穴列と柱穴群を検出した。これは既に完成された儀式の形態が成立していたことを改めて示すもので、宮殿儀礼の研究に貴重な事例を加えた。また、藤原宮造営時の運河を調査し、斜行溝が東北方に分流するという新たな事実が判明した。これは大極殿院南門建設開始後に迂回させたものと考えている。

朝堂院東地区では、北から実施してきた農業水路改修に伴う最終年次の発掘調査を実施した（第152－７次）。狭長な調査区であったが、想定した位置に南面大垣、内濠と外濠を確認した。また、内濠に北接して官衙区画塀や東西棟建物と考えられる柱穴も検出し、朝堂院東地区の土地利用を復元する手がかりが得られた。

内裏西官衙地区では、農業水路改修に伴う発掘調査を実施した（第152－６次）。東西溝２条を確認したが、これは宮内道路の両側溝であろう。

飛鳥地域では、石神遺跡で2007年度に引き続き、遺跡東限の様相を解明するための調査を実施した（第156次）。Ａ期の東限施設を確認し、８時期にわたる継続的な土地利用が判明するなど、石神遺跡の内容と性格を解明するうえで多くの成果が上がった。東限の塀には門が開くことが明らかとなり、その東側には外周の通路と推定される南北塀に挟まれた空間がある。また、Ａ１期には仏教関連施設と考えられる瓦葺礎石建物があったと考えられ、饗宴施設としての体裁を整える前段階には性格が異なる施設であった可能性が浮上した。石神遺跡の調査は2008年度で所期の目的を一応達成し、一時中断することとした。今後は、長年の成果を整理、分析し、報告書の刊行を目指すこととなる。

甘樫丘東麓遺跡では、７世紀前半の石垣を検出した第146次調査区の南側を調査している（第157次）。調査区東部では石敷や石組溝を確認した。第146次調査で検出している７世紀中頃（Ⅱ期）の石敷との関連が考えられる。また、石垣は本調査区内まで延びるものであり、今後の調査の進展に期待される。

高松塚古墳では、石室解体に引き続き墳丘の仮整備に伴う調査を実施し、旧地形や古墳の築造工程に関する重要な所見を得ることができた（第154次）。保存施設の撤去により34年ぶりに墓道部が露出し、壁面の精査では、従来知られていた大規模地震による大きな断層風陥没とともに、版築を突き破る亀裂を多数確認した。また、石室の東西にこれまで未確認であった２条の墳丘内暗渠を検出し、当初から古墳全体が綿密な計画性のもとに築造された状況を裏付けることができた。

飛鳥寺では、個人住宅建設に伴う３件の現状変更を実施した。講堂東北方の発掘調査では、瓦敷面とその南側に石組東西溝を検出した（第152－２次）。溝の南側石は長さ40cmほどの石を北側に面を揃えて据えていることから、これは基壇北辺の雨落溝の可能性があるもので、中心伽藍東北部における様相にあらたな知見を得るものとなった。寺の南東、寺域を画する南面築地塀の南約30mでの発掘調査では、飛鳥寺南方の石敷広場の東北隅部を検出した（第152－５次）。隅部から飛鳥寺伽藍中軸線までは、石敷広場の振れに沿って約62mとなる。広場石敷北端には縁石を置き、東縁では西は２段、東は３段に側石を積んだ階段状の石組溝が北へ延びる。

檜隈寺周辺では、国営歴史公園の整備に伴い、遺構の状況を確認するため、南北12カ所に調査区を設けて試掘調査を実施した（第155次）。南側では古代の顕著な遺構を確認することはできなかったが、北側では寺院関連施設と考えられる塀や建物の遺構を確認した。これについては、2009年度に本調査を実施し、檜隈寺の伽藍全体像を解明していくこととしたい。

2008年度に発掘調査に伴って実施した現地説明会、現地見学会、現場公開は以下の通り。

飛鳥藤原第153次調査（朝堂院朝庭）

現場公開　2008年６月30日～７月２日

現地説明会　2008年９月27日　玉田芳英・小田裕樹

飛鳥藤原第156次調査（石神遺跡）

現地説明会　2009年２月14日　青木　敬

平城京の発掘調査

都城発掘調査部平城地区における2008年度は平城宮内で9件、平城京内で13件の発掘調査を実施した。以下では主な調査の概要を示すにとどめ、小規模な調査については『奈良文化財研究所紀要2009』を参照していただきたい。

2008年4月から11月にかけて、平城宮第一次大極殿院の南面回廊（第431次調査）および西面回廊の調査（第432・436・437・438次）を実施した。

第一次大極殿院南面回廊の調査区は南面築地回廊の東半部に位置する。築地回廊の礎石痕跡を5間分検出した。桁行は約4.6m（15.5尺）等間、梁行は約7.1m（24.0尺）と復原される。回廊基壇の掘込地業と版築層とを確認した。掘込地業の深さは約30cm。このほか、回廊北側と南側に東西方向の雨落溝を検出し、院内庭部では礫敷面を確認した。

西面回廊の調査は4度にわけて実施した。検出した遺構は、回廊、門、塀、溝、広場、礫敷舗装、土坑、井戸などである。

大極殿創建期の西面築地回廊の基壇と東側の雨落溝を部分的に検出した。西側の雨落溝は完全に失われている。東雨落溝の幅は不明で東肩には径10cm程度の見切り石を据え、溝底にも細かい礫を敷き込む。内庭部の礫敷は径1～7cmの礫を敷く。大極殿が恭仁宮に移り、築地回廊が掘立柱塀に改修された時期の西面塀の柱穴を合計31基確認した。4基の柱穴には柱根が遺存しており、柱は直径45cm程度のコウヤマキである。また、この掘立柱塀の門を認した。この時期には内庭部の礫敷が改修されており径4～15cmの礫を敷いている。

旧大極殿院内が掘立柱建物の建物群に造り替えられ殿舎地区となる（Ⅱ期）が、この時期にも内庭部の礫敷きを改修しており、径1～4cmの小礫を敷いている。この時期の院の西面築地回廊の東西の側柱の礎石据付痕跡を、東柱列で6基、西柱列で1基検出した。凝灰岩暗渠はこの時期の西面築地回廊を横断して東から西へ排水していた。

Ⅱ期の殿舎地区がさらに大規模に改修された時期（Ⅲ期）の基壇辺を流れる南北溝と、基壇下を貫く暗渠を確認した。また、この時期の殿舎地区を南北に区切る東西塀の掘立柱の柱穴4基を検出した。もう一つの東西塀の掘立柱の柱穴を3基検出し、大極殿院東半部で検出した同遺構の西延長部分で、西面築地塀に取りつく。

出土遺物に土器、瓦などがある。土器は奈良時代～平安時代初頭の土器が出土している。8世紀後半～9世紀初頭のものが多い。瓦は築地回廊に使用された奈良時代の軒瓦が出土している。

第440次は東方官衙地区の調査である。2007年度の調査区南部で検出した土坑の全容を明らかにする目的で第440次調査を実施した。調査区は南北15m、東西17m、発掘面積は255㎡である。11月から翌年1月まで調査を実施した。

土坑の規模は東西約11m、南北約7mの不整形で、深さは約1mある。土坑内からは土器や瓦の破片が出土したほか、大量の木屑や自然木が層をなしていた。この木屑層の木質はほとんど腐っておらず、捨てた当時のままに近い状態で残存していた。木屑層には木器や木簡、木簡の削屑、木材を加工したときの削屑が大量に含まれていると予想されるため、すべてを取り上げた。その総量はコンテナで2700箱ほどになった。木屑層から出土した木製品のなかでは檜扇が多く出土したほか、用途不明の加工品が多数ある。

木簡は現在200点ほどが明らかになっており、人名を列記したものや字を練習した習書木簡が目立つ。重要なところでは宝亀の年号を記したものや衛府、衛士といった役所に関わる文字を書いたものがあり、この土坑の時期や官衙区画の性格を知るための重要な手がかりとなろう。

上記の土坑の周囲には掘立柱の建物が確認された。土坑の底から検出された柱穴は東西棟の建物で南北2間、東西5間以上で北側に庇がつく。この建物は土坑に壊されていることから、土坑より古い時期の建物である。土坑が埋まった後に建てられた建物は東西4間、南北4間の正方形の建物である。また、土坑の底からは2棟の掘立柱建物や糞便貯留穴とみられる小土坑が数基検出された。このように木屑を大量にふくむ土坑が掘られる前後には建物が建っていたことがわかり、この場所の機能が時代とともに変化していた様子が明らかになった。以上の成果は、東方官衙地区における官衙の構造や性格を把握するだけでなく、官衙のなかの変遷を解明するうえで重要な資料となるだろう。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体等の埋蔵文化財発掘技術者に対する研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信と展示公開普及、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報の整備充実、国際的な文化財の調査・保護活用に関する協力・援助と国際学術交流あるいは研修等についての企画調整、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における展示公開普及を中心とする、奈良文化財研究所がおこなう研究に係る事業について全体的・総合的に調整し、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

埋蔵文化財発掘技術者研修については、年度ごとに計画立案し、高度で専門的な研修を実施している。2008年度も、遺跡の発掘調査や整理報告において必要性が高い分野、あるいは、保存活用について、専門性の高い知識・方法が求められる課題についての研修を実施した。保存科学、写真撮影、報告書作成等について引き続き実施するとともに、分野を絞り込んで、鉄製武器類を研修のテーマとして取り上げた。かなり専門に特化した研修であったが、必要性の高さもあってか、好評であった。なお、専門性の高い研修を実施するという方針に基づき、これまで毎年開講していた一般研修は、2008年度をもって終了することとした。

文化財情報電子化研究およびシステム構築については、「遺跡GIS研究会」を開催するとともに、国内外の学会や研究会等において研究成果を公表したほか、遺跡情報の収集管理や活用に関する情報収集をおこない、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。また、2005年2月に刊行した『遺跡情報交換標準の研究』の記述を精密化する必要性から、これの改訂版を作成した。一方、日常的には遺跡・図書・写真データベースおよび航空写真データの入力、NARSフィルムのマイクロ化、NARSフィルム・ガラス乾板・大判フィルム・航空写真画像のデジタル化などを継続しておこなっている。

展示公開および普及に関しては、飛鳥資料館での展示・研究、平城宮跡資料館などでの展示公開事業を統括的に担当している。このうち飛鳥資料館については、別項にまとめているので参照されたい。平城宮跡資料館については、継続して常設展の改善・整備をおこなう一方で、常設展示のリニューアルについても基本構想を策定し、遷都1300年に合わせての具体化を目指している。また特別企画展として「地下の正倉院展」を開催し、長屋王家木簡を展示した。さらに都城発掘調査部が実施した平城宮の東院地区と東方官衙地区の発掘調査成果を速報展で紹介した。

文化財の調査・保護活用に関する国際協力と研究交流あるいは国際研修等についても、別項に記した。

写真関係では、引き続き、都城発掘調査部の平城地区と飛鳥藤原地区における発掘調査の記録作成を実施するとともに、展示公開等にともなう写真資料を作成した。また、高松塚古墳については、石室解体前の正確な図面と写真、およびそれらを作製する撮影手順等を記録した『高松塚古墳壁画フォトマップ資料』を刊行した。

なお、このほか全国の埋蔵文化財の調査・保存・活用などに関する情報収集、協力助言をおこなった。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室・建造物研究室・景観研究室・遺跡整備研究室の4室からなる。各室では、古都の寺社などが所蔵する古文書・古記録などの書跡資料や歴史資料、古代から近代にいたる歴史的建造物や発掘建築遺構、新たに文化財に加わった文化的景観、歴史的庭園、遺跡の保存整備活用などについて、それぞれ専門的な立場から文化遺産の実物に即した調査研究をおこない、その歴史的な意義を追究するとともに、関係部局とも協力しつつ、情報の収集整理・公開や保存修復・遺跡整備活用施策などにも資する総合的研究を進めている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、世界文化遺産に登録されている寺社所蔵の書跡資料について、南都を中心として継続的な調査研究をおこなっている。さらに奈文研に寄贈された歴史資料についても調査研究をしている。

2008年度の諸寺社の調査は、興福寺・薬師寺・東大寺・唐招提寺・氷室神社大宮家所蔵の書跡資料についておこなった。興福寺調査は、ここ数年にわたって、第71函～第80函、長持函、東金堂文書、国宝・重要文化財指定資料の目録を刊行すべく準備を進めてきた

が、本年度はそれらの再確認をおこない、『興福寺典籍文書目録第四巻』（奈良文化財研究所史料第83冊）として刊行した。写真撮影は、マイクロフィルムで第89函・第90函を、またブローニー版、一部は赤外線写真で長持函の一部を撮影した。薬師寺調査は、第31函～第53函の調書作成と、第24函の写真撮影を継続して実施した。

東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第４号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。第５函・第15函の写真撮影を実施し、また中村準一寄贈文書の第98函・99函を調査して、目録データをパソコンに入力した。また、先年発見した、重源以後の東大寺大勧進に関する基礎史料である第２函１括１号の調査研究を進め、その成果を吉川聡・小原嘉記・遠藤基郎「「東大寺大勧進文書集」の研究」（『南都仏教』91号所収）として公表した。

唐招提寺所蔵資料については、惣倉所在の近代書類を調査し、全体の再分類作業をおこなった上で、第２函のラベル貼り・目録データのパソコンへの入力作業を実施した。氷室神社大宮家文書については、昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で共同研究をおこない、未成巻文書の調書作成・写真撮影を実施した。また、公開データベース「大宮家文書データベース」のデータを追加し、成巻文書分すべてのデータを公開した。

当研究所所蔵の資料については、「関野貞日記」の翻刻作業を進め、当研究所所蔵分である明治30年～38年の日記全文・解説を、関野貞研究会編『関野貞日記』（中央公論美術出版、2009年）の一部として公表した。

その他調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査や、醍醐寺聖教調査などに協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する調査・研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に資する基礎データの蓄積を継続的に図っている。また、近年は、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の諸構法について再検証するための調査研究を、現存建築のみならず、修理などの際に保存された古材、発掘遺構・遺物などを研究対象として進めている。以下、2008年度におこなった主な調査研究内容を紹介する。

古代建築の諸構法に関する調査研究では、殿堂の構造システムと、扁額形状と建築構造の相関に関する問題を研究テーマとして掲げ、これらに関する現物調査と諸資料の収集・整理をおこない、成果を2009年３月８日開催の研究集会で発表し、参加者した研究協力者等との間でこの問題について討議した。なお、扁額に関するこの研究成果は、現在復原工事中の平城宮第一次大極殿に掲げる扁額に反映させるため、同工事における意匠・構造面の設計に協力するとともに、調査研究の成果を奈文研紀要2009で発表した。

2007年度に引き続き受託業務として実施した京都府近代和風建築総合調査は、明治以降、昭和20年代前後までに建設された和風建築を対象として、京都府が文化庁による国庫補助を得て2006年度から３カ年計画で実施している総合調査で、2008年度は最終年度に当たる。この調査は、同調査委員会において二次詳細調査物件としてあらかじめ選定された住宅建築、宗教建築、商業建築など153件、214棟にのぼる建築を対象として２カ年でおこなったもので、建物平面の実測、写真撮影等の現地調査のほか、文献調査、関連建物調査等を実施し、主要な物件では庭園調査もおこなった。調査成果は、京都府が刊行した調査報告書用の原稿として取り纏めた。

国外調査として、当研究所が海外関係事業として実施しているカンボジア・西トップ寺院遺跡の現地調査をおこなった。調査内容は、破損が著しい建物の図面を作製するための実測調査である。調査研究の成果は奈文研紀要2009で発表した。

調査研究の一環として研究所保管資料のうち、建造物乾板写真の画像デジタル化と、文化財建造物保存修理時における現状変更説明資料の刊行化を近年継続している。2008年度で刊行した現状変更説明資料は、1962年～1964年分で、これを本文編と図版編とに分けて刊行した。また、その他の刊行物として、2007年度に実施した出雲大社の境外社社殿調査の報告書と、ベトナム社会主義共和国ハタイ省ドゥオンラム村集落調査の英語版報告書がある。

このほか、全国各地で実施されている文化財建造物等の修理関係事業・史跡等整備事業での修理・復原・整備等に関する援助・助言をおこなった。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観に関する基礎的・体系的な調査研究および平安時代を中心とした古代庭園の変遷過程や系譜に関する調査研究を進めている。

文化的景観については、基礎的情報の収集・発信と、事例研究として高知県四万十川流域を対象とした文化的景観の調査研究をおこない、加えて文化的景観研究集会（第１回）を開催した。文化的景観に関する基礎的情報の収集・発信としては、国内外の関係法令、各重要文化的景観選定地区の概要、文化的景観に関連する文献等の収集をおこない、『文化的景観基礎資料集【未定稿】』としてまとめ、上記観研究集会で参考資料として配布した。

四万十川流域の文化的景観調査は、2006年度より継続しているもので、2008年度は現地調査をおこなうとともに、調査対象地域である津野町・檮原町・中土佐町・四万十町・四万十市の各行政担当者等との協議を通じて、各地域個別の文化的景観保存活用計画を作成した。以上の作業の過程で、調査方法や保存計画立案につき、種々の課題を抽出することができた。

文化的景観研究集会（第１回）は、「文化的景観とは何か？－その輪郭と多様性をめぐって－」というテーマで開催した。文化的景観の概念、制度、計画手法、重要文化的景観選定事例の検討を通じ、文化的景観についての共通認識の形成を図るとともに、その有効性と課題を確認し、次年度以降の研究集会開催へと繋げた。

庭園関係では、５カ年計画の中で平安時代の庭園を取り上げており、３年目である2008年度は、平安時代の発掘庭園に関するデータを収集するとともに、「平安時代の禁苑と離宮の庭」と題する研究会を開催し、あわせて2007年度の研究会の報告書を刊行した。

研究会では、平安時代初期までの古代都城にとっての苑地や離宮の庭のあり方について検討すべく、長岡京で「北苑」と呼ばれる遺跡、平安京の神泉苑、雲林院、河陽離宮について、各園池遺構の発掘成果の報告と検討をおこなった。また、同時代の唐長安城太極宮の後苑や禁苑・東大苑・西大苑の施設配置や利用の実態などについて文献史料からみた報告、『日本書紀』『続日本紀』にみる「苑」の特徴や神泉苑誕生の経緯に関する報告、園池配置の思想的背景についての報告があった。「苑」については彼我で規模や意味するものが違うことなどが、改めて認識された。

平安時代庭園を含む発掘庭園データベースについては新規データ50件、追記データ27件で更新した。

●遺跡整備研究室の調査と研究

本研究室では、全国各地における遺跡の整備に関する調査と研究をおこない、その情報を収集・整理・普及するとともに、遺跡の保存と活用に関する基本的な考え方やその実例への適用を検討することを主たる業務としており、遺跡の保存段階から、整備計画の立案、整備後の遺跡の公開・活用にいたるまでの総合的過程を視野に入れて調査研究活動に取り組んでいる。

現在、中心的に取り組んでいるのは「遺構露出展示に関する調査研究」である。具体的には、特に地下に埋蔵されていた遺構を露出展示している事例を中心として全国的な状況を網羅的に把握し、それぞれに生じている課題及びこれまでの対処に係る実績等を検証する作業を基礎として、実りある遺構露出展示のための基礎的検討を行うとともに、既に遺構露出展示をおこなっている事例が抱える課題への対処手法を整理し、また、これから遺構露出展示を検討する場合の指針案を提示することなどを目的としている。

2008年度は、都道府県教育委員会の文化財保護主幹課の協力を仰ぎ、全国における遺構露出展示の趨勢を把握するとともに、予備的な現地調査等をおこない、今後の調査研究の基礎となる「遺構露出展示事例所在一覧（基礎調査／未定稿）」を作成した。

これと並行して、今後取り組むべき課題を検討するために、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室と合同で「埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題」をテーマとする研究集会を開催した。この研究集会では、講演と報告を踏まえ、遺構露出展示を実現し、かつ、適切に維持管理・公開活用を行っていくための諸条件を柱とした討論を行うとともに、これからの遺構露出展示をさらに有意義なものとするための「遺構露出展示データベース」の構築と運用の在り方、あるいは、管理計画及び管理マニュアルの検討などに関わる様々な工夫について検討し、今後の調査研究における成果の具体的指標を明らかにした。

なお、2007年度に開催した研究集会「遺跡の保存管理・公開活用と指定管理者制度」については、その講演・報告・討議内容を取りまとめ、報告書として刊行した。

さらに、地方公共団体等からの依頼に基づき、各地

で進められている遺跡等の保存と活用に関わる計画立案、整備事業の実施等をはじめ、地域における文化遺産の総合的な保存と活用などについて、援助・助言をおこなった。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの4研究室では、埋蔵文化財に関係する調査技術や測定機器などの開発研究から応用研究までをおこなっている。また、国や地方公共団体からの要請に応じて、専門的な協力と助言を実施している。

●保存修復科学研究室の調査と研究

考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究においては、ガラス製遺物のレーザーラマン分光分析に関する文献の収集と標準試料のラマンスペクトルの集積、鉄製品に付着する繊維痕跡のX線コンピューテッドラジオグラフィ、有機溶剤への溶解性を利用した漆製遺物の新たな分析手法の確立、木製遺物の新規処理法の開発のひとつであるリグノフェノール含浸・超臨界溶媒乾燥法におけるスケールアップ実験に取り組んだ。

一方、遺跡の保存・整備・活用に関する技術開発研究においては、遺跡の水分状態を調査する方法を開発するため、福島市・宮畑遺跡において、基礎データの収集をおこなった。また、土壌水分特性を表す不飽和透水係数を求めるための実験装置を導入し、データ収集をおこなった。さらに、遺構土壌を安定化させるための土壌安定化剤を試作して室内実験をおこなった。また、遺跡整備研究室との共同して研究集会「埋蔵文化財の露出展示における成果と課題」を開催した。

受託事業として、長野県千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢保存修復業務委託（長野県）、秋田県漆下遺跡出土漆関連遺物分析調査（秋田県）、重要文化財奈良県黒塚古墳出土品事前調査並びに保存修理（文化庁）、長野県中野市柳沢遺跡出土の青銅器保存修復業務委託（長野県）、宝山寺獅子閣材料分析調査（奈良県）の5件を実施した。また、共同研究として、伝持田古墳群出土遺物の調査分析（辰馬考古資料館）、前原市潤地頭給遺跡出土準構造船の真空凍結乾燥法による保存研究（福岡県前原市）、松浦市鷹島海底遺跡出土3号椗の真空凍結乾燥処理に関する共同研究（長崎県松浦市）、北本市デーノタメ遺跡出土漆塗り土器の保存処理に関する共同研究（埼玉県北本市）、三野古墳群出土遺物の調査分析（立命館大学）の5件を実施した。

国宝高松塚古墳壁画の保存修理（文化庁委託）において、壁画の劣化原因の追究と保存修復に資するデータの集積を目的とした壁画材料の分析調査をおこなった。また、大きな亀裂を有する石室石材を拘束するための保護枠ならびに閉塞石を正置した状態で安定化させるための保護枠を製作した。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、これまで継続してきた独自の環境考古学、動物考古学の研究のかたわら、関連する国内外の発掘調査や、その後の整理・報告書の作成の指導および助言、執筆をおこなってきた。

国内での発掘指導および研究は、新潟県西郷遺跡（弥生）、大阪府大坂城下町跡（近世）、兵庫県宮内堀脇遺跡（中世）、奈良県橿原遺跡（縄文）、福岡県博多遺跡（中世）、佐賀県東名遺跡（縄文）、長崎県カラカミ遺跡（弥生）などを主体とし、特に東名遺跡出土の動物遺存体の分析、橿原遺跡の鹿角製根挟みや東名遺跡の鹿角製装身具などの骨角器製作技法の解明に成果を挙げることができた。海外での調査は、韓国慶南考古学研究所の実施した、金海蛤見里貝塚発掘報告書の環境考古学に関する部分の分担執筆をおこなっている。

学会等の発表は、明治大学で「海外の貝塚研究－北欧、北米、西アフリカからの視点－」、鹿児島県立歴史資料センター黎明館で「出土品から見た薩摩藩の動物利用」、佐賀県の東名遺跡公開シンポジウムで「湿地遺跡が語るもの」、山梨県の考古学と中世史シンポジウムで「考古学から見た動物の利用」、さらに、日本哺乳類学会では「考古学における家畜の議論と標本」を発表し、日本考古学協会愛知大会ではシンポジウムの司会と「弥生時代における狩猟と漁撈」を発表した。海外では、カナダ国バンクーバーで開催されたアメリカ考古学会、セネガル国ダカールで開催された貝塚ワークショップ、アイルランド国ダブリンでの世界考古学会議などで座長や発表をおこなった。

また、動物考古学の基礎資料となる現生動物骨格標

本に、ポニー、口之島牛、オオサンショウウオ、クロコダイル、セキショクヤケイなどの入手困難であった骨格標本を製作、もしくは購入し、収集標本を一層充実させることができた。また、これらの標本がより活用できるよう、『環境考古学８　哺乳類標本リスト』（埋蔵文化財ニュース136号）を刊行した。次年度以降も他の動物種のリストを公開し、内外の研究者や研究機関にも利用可能とする予定である。

●年代学研究室の調査と研究

当研究室では、考古学、建築史学、美術史学、歴史学研究などに資するべく、遺跡出土木材、木造建築物、木造美術工芸品などの年輪年代調査を実施している。また、年輪年代学のための技術開発にも積極的に取組んでいる。

建築史関連：国宝１棟・重文３棟を含む７府県下８棟の建造物に対して年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、国宝法隆寺金堂の修理にともなう年輪年代調査である。調査対象とした内陣天井板と支輪板の中に樹皮を剥いだだけの板材が含まれており、667年と668年に伐採されたヒノキ材が用いられていることが明らかになった。この結果は、2004年度に法隆寺西院伽藍の年輪年代調査を実施した際、金堂の外陣天井板から得られた年輪年代（667年および668年）とも一致し、この時の成果をあらためて裏付けることにもなった。

美術史関連：国宝１点を含む７府県下の15躯の木彫像ならびに１点の工芸品に対して年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、山口県長徳寺薬師如来坐像の年輪年代調査である。解体修理に際してマイクロフォーカスX線CTとデジタル画像計測による年輪年代調査をおこなった結果、1067年の年輪年代が得られた。この像は心材のみから成るので、造像に際して切削された辺材や心材に含まれていた年輪数を考慮すると、11世紀末ないし12世紀頃とする美術史学的な視点からの所見に矛盾しない。

歴史関連：２府県下２点の文字資料の年輪年代調査および樹種同定を実施した。特筆すべきは、滋賀県栗東歴史民俗博物館に寄託されている延徳三年（1491）と墨書された金勝寺制札の年輪年代調査である。この制札は心材のみから成り、調査の結果1438年の年輪年代が得られた。原木から製材する過程で切削された辺材や心材に含まれていた年輪数を考慮すると、年輪年代と制札に書かれた年代が概ね整合し、年輪年代と歴史資料との関係を示す好例となった。

技術開発関連：年輪のデジタル画像計測に関するコンピュータアルゴリズムの特許「木材の年輪箇所検出方法および年輪幅計測方法」（特許第4218824号）が成立した。これは、当研究室で年輪年代学研究を進める上で欠かすことのできない重要な技術である。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務としている。

2008年度は、遺跡およびその調査法の領域では、前年度にひきつづき、古代の寺院および官衙関連遺跡と豪族居宅遺跡などの資料を収集整理した。収集・補訂した資料はデータベース化し、遺跡の性格や所在地、文献目録、おもな遺構と遺物、建物の詳細データと、地図や遺跡全体図、建物図面などの画像データを、奈良文化財研究所のホームページ上で公開している。また、2007年度に開催した研究集会「古代地方行政単位の成立と在地社会」についての研究を進め、論文報告集を刊行した。このほか、文化庁の委託を受けて、2010年３月刊行予定の『発掘調査のてびき』の作成作業にもあたっている。

一方、文化財の調査技術の領域では、測量、計測、探査を中心に活動をおこなった。測量分野では、国内の埋蔵文化財担当者を対象とする専門研修を実施し、計測分野では、山内清男考古資料や生駒市の森家墓所を計測して、複雑な形状をもつ対象物や摩滅した碑文に対する三次元計測の有効性を確認した。また、中国遼寧省の隋唐期墳墓出土資料のデータ取得を継続するとともに、調査や整理において現実的に普及可能な廉価な機器の導入と精度の検証作業をつうじて、その有効性を明らかにした。そのほか、第３回DDCH（文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワークショップ）を共催した。

探査分野では、平城宮や藤原宮のほか、大学や地方公共団体と連携・共同して、地中レーダ探査、電気探査、磁気探査を日本各地でおこなった。水戸市台渡里遺跡では、正倉の区画溝や倉庫の地業・柱穴を確認し、建て替えを判読することができた。また、平城宮東方官衙地区では、木簡廃棄土坑の範囲を確定し、発掘計

画の立案に寄与した。これらと並行して、既存の探査データについても整理を進めている。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、現在、中国、韓国、カンボジアの３カ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、アフガニスタンとイラクを対象とする西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業や2006年６月に発足した文化遺産国際協力コンソーシアム（事務局は東京文化財研究所に設置）のおこなう支援協力事業にも協力している。2008年度の各事業の概要は以下の通りである。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

2008年度は、2008年３月に取り交わした日中共同発掘調査の協議書にもとづき、春と秋の２回にわたって共同発掘調査を実施した。

この共同発掘調査では、河南省洛陽市に位置する北魏洛陽城の宮城中枢部分を解明することを目標とした。中国側の事前調査では、宮城の正門と太極殿をとおる中軸線上に、いくつかの建物基壇が存在していることをあきらかにしている。2008年度は正門の北側にある２号門址およびその周辺の状況を確認することとなった。

春季は門基壇の南北の規模、建物の左右にとりつく城壁の様相、基壇周囲の道路遺構の位置の確認を目的として５カ所の試掘を実施した。この調査には４月中旬より５月末まで研究員１名を派遣した。５月末にはさらに２名の研究員を派遣し発掘調査状況の写真撮影と秋季調査の協議をおこなった。

秋季は春季の成果をふまえて２号門の基壇を全面的に発掘調査した。発掘調査面積は2400㎡である。門の基壇は現地表下30～40㎝のところで検出した。基壇の規模は南北23m、東西45mの長方形で、門の通路が３条あり、前面と後面には通路に対応するスロープが３基ずつ確認された。また多量の瓦、磚、土器その他金属製品などが出土した。秋季の発掘調査には11月から12月にかけて１名を派遣したほか、12月にさらに３名を追加派遣した。また、12月には所長ほか２名が共同発掘調査の視察をおこなった。

２月末には中国社会科学院考古研究所の副所長ほか２名を日本に招聘し、今年度の成果報告会を開催し、調査成果についての検討をおこなったほか、2009年度の共同調査について協議した。

●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究

遼寧省文物考古研究所との共同研究は、2006年度から朝陽市隋唐墓出土副葬遺物の調査・整理・研究を行っている。2008年度は10月11日から25日の15日間と、３月７日から17日の11日間、瀋陽市の遼寧省文物考古研究所で調査を実施した。いずれも遺物の実見、熟覧と調書作成、撮影、実測、３次元測定などの考古学的調査に加え、自然科学的分析調査を実施した。調査者は、秋が所外の研究者も含めて計８名、冬が所内の研究者計7名である。

2008年度の調査対象は遼寧省文物考古研究所などによって朝陽市で発掘調査された蔡須達墓、襯布廠墓、西葯廠墓、紡績廠墓、双塔小区墓など18カ所に所在した唐墓の副葬品である。陶俑、陶磁器類、土器類、銀製品、銅製品、鉄製品、土製品など計156点の出土遺物を調査した。

秋期調査における３次元計測は、作業の効率化を図るため、大型と小型の３Ｄデジタイザを１台ずつ用意し測定物の大きさに応じて使い分け、並行して測定を実施した。

自然科学的分析は蛍光Ｘ線分析と顕微鏡による微細な観察・撮影を行った。蛍光Ｘ線分析装置は本体が約２kg、運搬用ケースも含めて総重量約７kgの携帯式のものを用いた。これは６月に天理参考館所蔵陶俑の調査で試験的に使用した結果、十分実用にかなうことが確かめられたものである。今回、装置を固定する治具を作成し改良を加えてより実用的にしており、初めての本格的な運用となった。蔡須達墓出土の武士俑、文吏俑、駱駝俑などの顔料などを分析した。顕微鏡も運搬･移動に便利な小型のものを使用した。

11月には遼寧省文物考古研究所員ほか６名を招聘し、李新全副所長による朝陽市隋唐墓の調査研究の最新成果について講演会を実施した。

●中国河南省文物考古研究所との共同研究

2008年度は第Ⅱ期５カ年計画の４年目にあたり、河南省文物考古研究所による鞏義市白河水地河地区の発

掘調査で発見された窯址出土品の調査が中心となった。2008年5月には研究員を3名派遣し、河南省文物考古研究所において水地河2007年度調査の出土資料を観察した。また、10月には飛鳥資料館において「まぼろしの唐代精華－黄冶唐三彩窯の考古新発見－展」が開催されたのを機に河南省文物考古研究所の研究員が来所し、関連遺物の共同調査を実施した。次いで11月には、研究員7名を河南省に派遣し、図録『白河窯址考古新発見』のための写真撮影・調書作成をおこなった。調査の対象は白河水地河地区の出土品で北魏青磁・白磁にはじまり、唐三彩・白磁、窯道具など約300点におよんだが、数日間の作業で調査を終え、貴重なデータを収集することができた。

一方、黄冶窯出土資料の鉛同位体比分析を別府大の平尾良光氏に依頼し、その成果報告を2009年3月に受領した。この成果は2009年度に中文に翻訳のうえで、黄冶唐三彩窯の正報告に掲載する予定である。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

2005年12月より大韓民国国立文化財研究所との間で、「日本の古代都城並びに韓国古代王京の形成と発展過程に関する共同研究」というテーマのもとに共同研究をすすめている。2008年度はあらたな3カ年の初年度にあたる。今回の共同研究には研究細目として掲げた4課題に則して奈良文化財研究所8名、韓国国立文化財研究所9名の研究者が参加し、それぞれが設定した都城制・考古資料・古建築・遺跡整備などに関する13件の研究を開始した。今年度の交流実績は、研究協議のための招聘1件、研究員派遣7名、研究員受け入れ9名である。研究員は訪問先において相互に研究報告を行うことにしており、奈良文化財研究所ではこれに関連して4回の報告会を実施した。

2006年度より開始した国立慶州文化財研究所との発掘調査交流では、奈良文化財研究所より研究員1名を2カ月間派遣し、統一新羅時代の寺院である四天王寺址および新羅古墳群のチョクセン遺跡等で共同発掘調査をおこなった。慶州文化財研究所からは研究員1名を2カ月間受け入れ、飛鳥石神遺跡・甘樫丘東麓遺跡・平城京跡等において共同発掘調査をおこない、あわせて奈良を中心に都城遺跡・古代寺院遺跡の見学をおこなった。また、研究状況視察のための招聘1件を実施した。

●西アジア諸国の文化財修復保存協力事業

アフガニスタン、イラクを対象とする文化遺産保存修復協力事業であり、東京文化財研究所と共同で実施している。本年度は両国とも、治安情勢が良好ではないことを鑑み、現地での調査や研修は実施せず、日本における研修をおこなった。

アフガニスタンからは、情報文化省考古学研究所より2名の研究員を招聘し、奈良文化財研究所においては3カ月間の考古学研修を実施した。平城宮跡内でおこなわれている発掘調査に多くの時間参加して、遺構検出、掘り下げ、遺構実測、遺物の取り上げなど、発掘調査の全過程にわたる作業の実際を体験・研修した。またそれらの他に、測量実習や土器を中心とする遺物の実測実習もおこなった。

イラクからは、2名の研究者を招聘し、奈良文化財研究所において1カ月近くにわたり、金属製遺物の保存処理をおこなった。観察からX線を利用した材質調査、クリーニング、脱塩処理、強化処理、接合、充填・補採、パッキングに至る一連の作業である。

●カンボジアAPSARAとのアンコール遺跡群西トップ寺院の共同研究

2002年度の覚書調印によってはじまった西トップ寺院の調査研究は、2006年度から第二フェイズに入り、中央祠堂隣接地での調査を開始した。

2008年度も8月と12月に発掘調査を計画したが、12月は経由地のタイ国内の情勢不安により調査本隊の出発を中止し、調整作業のみをおこなった。8月の発掘調査では祠堂の東南隅部に調査区を設定し、塼敷遺構などを発見した。12月におこなえなかった発掘調査の代替調査として1月に遺物調査をおこなった。建築班は8月に祠堂全体の実測作業をおこない、保存科学班は2月に全体的な調査をおこなった。

招聘事業では3月に王立芸術大学を卒業した若手研究者2名を招聘した。

特筆すべき事項として、⑭タダノによる調査修復機材の贈呈があげられる。2008年5月に高所作業車スーパーデッキとクレーン付きトラックのカーゴクレーン各1台が、12月には移動式クレーンのラフテレーンクレーン1台の贈呈を受けた。これらの機材は現地で活動する日本隊への贈呈ということで、今後、有効活用に向けての当研究所としての体制と事業展開の検討の必要性が増して来ている。

査／運営費交付金
●高妻　洋成：カンボジア王国／08.6.10～6.13／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査／運営費交付金
●肥塚　隆保：カンボジア王国／08.6.10～6.14／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査／運営費交付金
●森本　晋：ドイツ連邦共和国・フランス共和国／08.6.10～6.20／バーミヤン遺跡保護専門家協力会議出席ならびにバーミヤン遺跡関連資料の調査／運営費交付金
●小林　謙一：中華人民共和国／08.6.18～6.21／遼寧省文物考古研究所との共同研究打合せ／運営費交付金
●小池　伸彦：中華人民共和国／08.6.18～6.21／遼寧省文物考古研究所との共同研究打合せ／運営費交付金
●西口　壽生：中華人民共和国／08.6.22～6.26／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●小田　裕樹：中華人民共和国／08.6.22～6.26／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●丹羽　崇史：中華人民共和国／08.6.22～6.26／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●松井　章：アイルランド共和国／08.6.28～7.5／アイルランド国ダブリンにおいて開催される世界考古学会議への出席・発表／科研費
●平澤　毅：カナダ／08.6.30～7.16／ユネスコ世界遺産委員会出席／運営費交付金
●石村　智：カナダ／08.7.1～7.14／ユネスコ世界遺産委員会出席・情報収集／運営費交付金
●森本　晋：カナダ／08.7.1～7.16／ユネスコ世界遺産委員会出席・世界遺産視察／東文研
●松村　恵司：大韓民国／08.7.22～7.24／2008年度発掘調査員研修教育の講演／先方負担
●青木　敬：大韓民国／08.7.22～9.19／日韓共同研究の発掘調査交流のため／渡航：運営費交付金、滞在：先方負担
●松井　章：アメリカ合衆国／08.7.24～8.4／縄文文化と北米北西海岸先史文化の比較研究、マッド・ベイ遺跡の発掘に参加し、出土遺物を検討／科研費
●大林　潤：カンボジア王国／08.8.1～8.10／アンコール遺跡群西トップ寺院の建造物調査／運営費交付金
●番　光：カンボジア王国／08.8.1～8.10／アンコール遺跡群西トップ寺院の建造物調査／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／08.8.1～8.14／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査／運営費交付金
●石村　智：カンボジア王国／08.8.1～8.14／アンコール遺跡群西トップ寺院の現地調査／運営費交付金
●清水　重敦：カンボジア王国／08.8.2～8.10／アンコール遺跡群西トップ寺院の建造物調査／運営費交付金
●豊島　直博：カンボジア王国／08.8.4～8.10／アンコール遺跡群西トップ寺院の建造物調査／運営費交付金
●島田　敏男：ベトナム社会主義共和国／08.8.7～8.15／文化庁がおこなっているベトナムへの協力事業にかかる、ハタイ省ドゥオンラム村保存協力と、次期協力が検討されているフエ省フクティク村の予備調査／他機関負担
●千田　剛道：大韓民国／08.9.9～9.14／「遺跡出土の建築部材に関する総合的研究」にかかる資料収集と、韓国研究者との情報交換／科研費
●島田　敏男：大韓民国／08.9.9～9.14／「遺跡出土の建築部材に関する総合的研究」にかかる資料収集と、韓国研究者との情報交換／科研費
●井上　和人：ベトナム社会主義共和国／08.9.11～9.15／国際シンポジウム「ベトナムにおける日本学研究促進に向けて」に招聘され、「日本および東アジアにおける古代都城建設の歴史的意味」についての研究を報告する／先方負担
●渡邉　晃宏：大韓民国／08.9.28～9.30／日韓共同研究にともなう資料調査／渡航：運営費交付金、滞在：先方負担
●馬場　基：大韓民国／08.9.28～10.5／日韓共同研究にともなう資料調査および、木簡構文についての意見交換と韓国文字資料の見学／渡航：運営費交付金、滞在：先方負担・科研費
●杉山　洋：中華人民共和国／08.10.2～10.8／飛鳥資料館秋期特別展の展示品の借用／運営費交付金
●加藤　真二：中華人民共和国／08.10.2～10.8／飛鳥資料館秋期特別展の展示品の借用／運営費交付金
●森本　晋：タジキスタン共和国／08.10.8～10.14／タジキスタン歴史考古博物館収蔵資料整理に関する技術協力／運営費交付金
●小林　謙一：中華人民共和国／08.10.11～10.15／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●金田　明大：中華人民共和国／08.10.11～10.18／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●牛嶋　茂：中華人民共和国／08.10.11～10.22／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●和田　一之輔：中華人民共和国／08.10.11～10.22／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●児島　大輔：中華人民共和国／08.10.15～11.1／漢代石闕の調査および関連資料の収集のため／他機関科研費
●小池　伸彦：中華人民共和国／08.10.18～10.25／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●脇谷　草一郎：中華人民共和国／08.10.18～10.25／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●森本　晋：キプロス共和国／08.10.19～10.28／ヴァーチャルシステム・マルチメディア学会出席・発表／運営費交付金
●降幡　順子：中華人民共和国／08.10.22～10.25／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●丹羽　崇史：中華人民共和国／08.10.29～11.1／Symposium Celebrating the 80th Anniversary of Scientific Archaeological Excavations at Yinxu, Anyang, Chinaに参加のため／運営費交付金
●窪寺　茂：中華人民共和国／08.10.29～11.2／中華人民共和国国家文物局主催・木造建造物塗装の保存に関する国際セミナーへの参加／先方負担
●加藤　真二：中華人民共和国／08.11.2～11.9／河北・河南両省における壁画・遺物の調査／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／08.11.4～11.9／カンボジアにおける共同研究に関する調整と打合せ／運営費交付金
●城倉　正祥：中華人民共和国／08.11.4～12.26／中国社会科学院考古研究所との漢魏洛陽城共同発掘調査／運営費交付金
●内田　和伸：大韓民国／08.11.6～11.10／文化遺産の保存と活用の事例調査／科研費
●林　正憲：大韓民国／08.11.10～11.20／日韓共同研究にもとづく調査／渡航：運営費交付金、滞在：先方負担

●松井　章：台湾／08.11.12～11.17／台湾の在来家畜の考古科学的研究に関する指導および助言／先方負担
●西口　壽生：中華人民共和国／08.11.13～11.20／河南省文物考古研究所との共同研究としての黄冶窯・白河窯出土遺物の調査／運営費交付金
●玉田　芳英：中華人民共和国／08.11.13～11.20／河南省文物考古研究所との共同研究としての黄冶窯・白河窯出土遺物の調査／運営費交付金
●森川　実：中華人民共和国／08.11.13～11.20／河南省文物考古研究所との共同研究としての黄冶窯・白河窯出土遺物の調査／運営費交付金
●牛嶋　茂：中華人民共和国／08.11.13～11.20／河南省文物考古研究所との共同研究としての黄冶窯・白河窯出土遺物の調査／運営費交付金
●小田　裕樹：中華人民共和国／08.11.13～11.20／河南省文物考古研究所との共同研究としての黄冶窯・白河窯出土遺物の調査／運営費交付金
●丹羽　崇史：中華人民共和国／08.11.13～11.20／河南省文物考古研究所との共同研究としての黄冶窯・白河窯出土遺物の調査／運営費交付金
●井上　和人：ベトナム社会主義共和国／08.11.22～11.26／ベトナム・タンロン皇城遺跡保護支援事業にともなう「タンロン皇城価値評価国際シンポジウム」で報告のため／渡航：他機関負担、滞在：先方負担
●杉山　洋：カンボジア王国／08.11.26～12.9／カンボジアにおける共同研究に関する調整と打合せ／運営費交付金
●森本　晋：カンボジア王国／08.11.29～12.3／フランス極東学院GIS・データベース研究会出席／運営費交付金
●清水　重敦：中華人民共和国／08.11.29～12.4／中国における建造物の保存修理とオーセンティシティに関する現地調査／科研費
●森本　晋：ベトナム社会主義共和国／08.12.3～12.8／地理情報技術に関する太平洋近隣友好協会総会出席／運営費交付金
●箱崎　和久：大韓民国／08.12.7～12.13／日韓共同研究にもとづく古代建築に関する資料収集／渡航：運営費交付金、滞在：先方負担
●小田　裕樹：中華人民共和国／08.12.8～12.19／漢魏洛陽城における共同調査への参加／運営費交付金
●高橋　知奈津：中華人民共和国／08.12.8～12.19／漢魏洛陽城における共同調査への参加／運営費交付金
●小林　謙一：大韓民国／08.12.10～12.13／国際学術大会に参加／先方負担
●高田　貫太：大韓民国／08.12.10～12.14／韓国国立慶州文化財研究所主催シンポジウム『新羅護国の念願、四天王寺』への参加と発表／先方負担
●田辺　征夫：中華人民共和国／08.12.13～12.19／漢魏洛陽城共同調査、唐長安城含元殿の復原基壇等の視察／運営費交付金
●小林　謙一：中華人民共和国／08.12.13～12.19／中国社会科学院考古研究所との共同研究／運営費交付金
●中村　一郎：中華人民共和国／08.12.13～12.19／漢魏洛陽城における共同調査への参加／運営費交付金
●小澤　毅：中華人民共和国／08.12.13～12.19／漢魏洛陽城における共同調査への参加／科研費
●杉山　洋：中華人民共和国／08.12.14～12.22／飛鳥資料館平成20年度秋期特別展借用品の返却、21年度春期特別展の写真撮影、展示品の購入／運営費交付金
●加藤　真二：中華人民共和国／08.12.14～12.22／飛鳥資料館平成20年度秋期特別展借用品の返却、21年度春期特別展の写真撮影、展示品の購入／運営費交付金
●井上　直夫：中華人民共和国／08.12.14～12.22／飛鳥資料館平成20年度秋期特別展借用品の返却、21年度春期特別展の写真撮影、展示品の購入／運営費交付金
●粟野　隆：大韓民国／08.12.15～12.19／韓国の遺跡の整備・活用に関する現地調査／渡航：運営費交付金、滞在：先方負担
●関広　尚世：スーダン共和国／09.1.16～1.27／カメイ社会教育財団助成研究の実施／他機関負担
●森本　晋：ドイツ連邦共和国・フランス共和国／09.1.26～1.31／ガンダーラ仏教美術資料調査とバーミヤン遺跡保護に関する専門家国際会議出席／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／09.1.29～2.7／アンコール文化遺産保護に関する共同研究／運営費交付金
●石村　智：カンボジア王国／09.1.30～2.7／アンコール遺跡群西トップ寺院の調査／運営費交付金
●肥塚　隆保：カンボジア王国／09.2.3～2.7／アンコール遺跡群西トップ寺院の調査研究／運営費交付金
●高妻　洋成：カンボジア王国／09.2.3～2.7／アンコール遺跡群西トップ寺院における石材調査／科研費
●金田　明大：カンボジア王国／09.2.3～2.7／アンコール遺跡群西トップ寺院における石材調査／科研費
●田辺　征夫：ベトナム社会主義共和国／09.2.7～2.12／農村集落保存協力に対するベトナム政府からの表彰式出席およびベトナムにおける遺跡保存の実態調査／運営費交付金
●井上　和人：ベトナム社会主義共和国／09.2.7～2.12／農村集落保存協力に対するベトナム政府からの表彰式出席およびベトナムにおける遺跡保存の実態調査／運営費交付金
●島田　敏男：ベトナム社会主義共和国／09.2.7～2.12／農村集落保存協力に対するベトナム政府からの表彰式出席およびベトナムにおける遺跡保存の実態調査／運営費交付金
●児島　大輔：大韓民国／09.2.8～2.13／統一新羅時代の仏教美術の調査／科研費
●森本　晋：インド／09.2.11～2.21／アジャンタ遺跡における仏教壁画の資料調査／運営費交付金
●黒坂　貴裕：中華人民共和国／09.2.17～2.24／「遺跡出土の建築部材に関する総合調査」の類例調査／科研費
●金田　明大：大韓民国／09.2.18～2.22／文化財GIS国際学術シンポジウムにおける発表および意見交換／先方負担
●杉山　洋：カンボジア王国／09.2.21～3.1／アンコール文化遺産保護に関する共同研究／運営費交付金
●浅野　啓介：大韓民国／09.2.23～2.28／日韓共同研究にともなう資料調査／渡航：運営費交付金、滞在：先方負担
●小田　裕樹：大韓民国／09.2.23～2.28／日韓共同研究における資料調査／渡航：運営費交付金,滞在：先方負担
●松井　章：アメリカ合衆国・カナダ／09.2.26～3.4／「植物食に関する北米北西海岸先史時代と縄文時代の比較研究」に関する資料調査／他機関負担
●井上　和人：ベトナム社会主義共和国／09.3.1～3.7／ハノイ・タンロン皇城遺跡の調査研究支援／文化庁
●高妻　洋成：中華人民共和国／09.3.5～

3.7／木製文化財の保存処理に関する資料収集／運営費交付金
●松井　章：ラオス人民民主共和国／09.3.6～3.15／ラオスにおける家畜、家禽の調査／科研費
●牛嶋　茂：中華人民共和国／09.3.7～3.14／朝陽地区隋唐墓の整理と研究／運営費交付金
●城倉　正祥：中華人民共和国／09.3.7～3.14／朝陽地区隋唐墓の整理と研究／運営費交付金
●小池　伸彦：中華人民共和国／09.3.7～3.14／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●和田　一之輔：中華人民共和国／09.3.7～3.14／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●豊島　直博：中華人民共和国／09.3.7～3.14／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●小林　謙一：中華人民共和国／09.3.11～3.17／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●降幡　順子：中華人民共和国／09.3.14～3.17／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●加藤　真二：中華人民共和国／09.3.16～3.20／出土遺物、壁画調査／運営費交付金
●森川　実：中華人民共和国／09.3.16～3.20／中国河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

公開講演会

第102回公開講演会
2008年6月28日
◆田辺所長 ミニ講演：平城宮跡国営公園化のこと

◆大林　潤：西大寺食堂院の井戸と古代
都城発掘調査部が2006年度におこなった、西大寺食堂院の発掘調査で検出した奈良時代の井戸の遺物を題材に、遺構や遺物の調査から判明した西大寺の造営過程に関する成果を報告した。

創建当初の西大寺に関する文献史料は限られており、『西大寺流記資財帳』より完成段階の建物がわかる程度である。発掘調査では、史料にみえる建物と同規模の遺構を検出し、その配置計画を明らかにした。また、井戸からは食品、食器、木簡、瓦などの多種多様な遺物が出土し、奈良時代の西大寺僧の食生活を示す膨大な資料となった。

井戸枠自体は巨大なヒノキの板材を組み合わせたもので、木材調達や加工方法を知る上でも重要な遺物であった。講演では、表面に打たれた刻印に注目し、これらが流通段階で打たれた可能性が高いことを指摘した。そして、この刻印にはまだ謎が多く、解明にはもっと多くの類例を調査する必要性があることを述べた。

◆窪寺　茂：造形意識の変革－霊廟建築に見る装飾意匠とその手法－
私はこれまで、わが国の木造建築に用いられた木地色付けの技法に関する研究を継続しており、近世以前に普及していた木地色付けの中には今日に伝承されていないものがあることを把握してきている。また、色付けそのものが経年の中で失われ、現在目にする建築の姿が建設当時と大きく変化している点を指摘してきている。この双方の実態を踏まえると、建物の現状を単に見ることだけを通じて、日本建築の美や建築文化の特質を論じることは問題が大きいことが理解される。

本講演は、この問題意識に基づきおこなったもので、古代から近世までの代表的な寺社建築の様相を画像でまず紹介して、建築装飾の時代相を示した。その上で、近世寺社建築の本来の姿が今日見るものと乖離している点を、廃絶した一部の木地色付け技法を紹介しつつ解説した。

日本建築の姿は時代が進むにつれ多彩さを増して来た。その多彩さに、より特徴的な変化をもたらした装飾技法として、部材木地面そのものを美しく見せる色付け技法があり、これが近世初頭に建築界に出現した。

その建築とは、徳川家光が建築した家康廟、すなわち日光東照宮の諸社殿建築で、導入された色付け技法は「唐木色付」と江戸期に称されていたものである。しかし、その本来の姿は今日に伝わっていない。近世に入り普及した木地色付け技法には、ケヤキなどに見られる木地表面の特徴を際立たせるための技法がこの他にいくつかあるが、これらは発色が消えてなくなる共通点を持っている。このことを最後に紹介して、歴史的な建築の特質を把握する難しさを指摘した。

第103回公開講演会
2008年10月25日
◆田辺所長 ミニ講演：復原第一次大極殿の棟飾りについて

◆森川　実：平城宮とその周辺の先史時代
平城宮とその周辺に広がる平城京域を中心に、これまでの発掘調査で明らかとなった奈良時代以前の遺跡を紹介した。平城京では、旧石器時代の遺物が数箇所で出土したほか、縄文時代の遺物包蔵地・遺構も確認されてきているが、これら先史時代の遺物・遺構は発見例がいまだ多くない。一方、弥生時代になると遺跡数は増加し、古墳時代の遺跡では巨大古墳のほかに埴輪窯・自然流路・住居址などが見つかっている。

平城宮内では既往の研究を参考に古地形（奈良時代以前の地形）を復元し、その復元図に各時代の遺跡・遺物出土地点をプロットした。旧石器・縄文時代の遺物出土地点は宮内の台地上にあるが、地点の数は少なく、また原位置ではない。一方、弥生時代の集落址が宮南辺付近の低地（沖積地）に、古墳時代の巨大前方後円墳・小規模な古墳は台地上に占地することを再確認した。こうした奈良時代以前の遺跡は平城京の造営で多くが破壊されたとみられるが、８世紀以前を考えるうえでいずれも重要である。

◆粟野　隆：洋風庭園と日本近代
近代日本における洋風庭園の様式形成過程と空間デザインの特徴を通史的に紹介した。

本講演では、明治初期における岩倉全権使節に代表される海外渡航者の西欧庭園観や、築地ホテル館庭園、横浜高台英役館庭園など外国人居留地に顕現した擬洋風庭園について述べ、明治中後期における住宅の近代化－和洋両館の併置という建物配置形式の変容－が和洋の折衷空間として「芝庭」を生み出したことを解説した。また、明治後期以降は軽井沢や葉山などの海浜・高原等の近代別荘地の洋風庭園が乗馬やゴルフ等の近代スポーツレクリエーションに供された点に言及し、さらに生活改善同盟会などが展開した住宅改良運動によって、東京近郊および阪神間の郊外住宅地には、「実用主義」といわれる新たな洋風庭園像が模索されたことを指摘した。あわせて、小平義近、福羽逸人、市川之雄、田村剛、ジョサイア・コンドルなど、洋風庭園の空間クリエイターについても若干報告した。

研究集会

◆遺跡整備・保存修復科学合同研究集会

2009年1月30日～31日

奈良文化財研究所では、毎年「遺跡整備・活用研究集会」及び「保存科学研究集会」をそれぞれ文化遺産部遺跡整備研究室及び埋蔵文化財センター保存修復科学研究室が企画・実施している。本年度においては、「埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題」のテーマの下、調査・計画・技術の観点から密接な関連を有する両研究集会を合同で開催した。

基調講演では「遺構露出展示の意義と計画」として、広く歴史遺産の観点から露出展示の意義を捉え、これまで取り組まれてきた事例が種類別に検討された。事例報告では、《様々な遺構露出展示の実績と課題》をテーマとし、5つの報告を通じて、さまざまな観点から、遺構露出展示の成果と現状の具体的課題が示された。技術報告では、《遺構露出展示のための調査法》をテーマとし、4つの報告を通じて、遺構露出展示を検討する場合において必要な調査とそのための様々な手法などが示された。

総合討論では、「環境条件」、「遺構条件」、「展示条件」、「管理条件」を柱とした議論を行うとともに、これからの遺構露出展示をさらに有意義なものとするための「遺構露出展示データベース」の構築と運用の在り方、あるいは、管理計画及び管理マニュアルなどに関わる様々な工夫について検討された。（平澤 毅）

◆文化的景観研究集会（第1回）

2009年2月20日～21日

本研究集会は、「文化的景観とは何か？－その輪郭と多様性をめぐって－」をテーマとして開催し、計193名の参加を得た。

基調講演では、採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観を扱うことの難しさや農林水産業に関連する文化的景観における生態学的な留意点等について示された。

基調報告からは文化的景観保護制度と景観法との関係が改めて整理されたとともに、最新の取組状況を踏まえた課題や今後の展望などが示された。

重要文化的景観の保護に関する5つの事例報告では、各地域における文化的景観の意義や制度運用上の課題などが示された。

以上の観点を受けて、第4部として総合討議をおこない、文化的景観の価値の捉え方や保護の在り方、またその意義等について検討した。

今回の研究集会を通じて、これまで農林水産業に関連する文化的景観と、採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観とで別々に議論されてきた「文化的景観」を同じテーマのもとで議論することができ、圏域レベルでの景観地保護の可能性という両者の共通点や、本質的価値として捉えられる視点などの相違点が明らかになった。（恵谷 浩子）

◆古代庭園研究会

2009年10月10日31日

2008年度は、「平安時代の禁苑と離宮の庭」と題する研究会を開催した。研究報告は、内田和伸「宮殿・苑地配置の思想的背景」、北田裕行「隋唐長安城の後園と三苑」、國下多美樹「長岡京北苑研究の現状」、長戸満男「神泉苑の調査」、吉野秋二「日本古代の禁苑と離宮」、古閑正浩「河陽離宮と周辺の景観」、鈴木忠司「雲林院跡の調査」であった。

古代の文献に「園」や「苑」など庭園を示す名称は散見されるが、六国史の中での「苑」は王宮に隣接・附属し、天皇や大王が領有する“禁苑”として使用されており、『日本書紀』にみえる「白錦後苑」、『続日本紀』の「松林苑」「南苑」「城北苑」、『日本略紀』の「神泉苑」は意識して区別する必要性があることが共通認識となった。唐長安城の太極宮の北部では四海を意匠した庭が設けられるなど、日本の禁苑の園池の意匠をみる上で示唆に富む事例も報告された。（内田 和伸）

◆古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播

2009年3月14日～15日

東アジアの瓦研究は、近年、文様論にくわえて製作技術に着目した研究がかなり進展しつつあるが、現状ではなお総合的な変遷観が確立されているとはいいがたい。

そこで、2005年から4年間にわたり、科学研究費補助金（基盤研究A）の交付を受けて、中国と朝鮮半島・日本の4～7世紀の瓦をおもな対象に、各国で製作技法を中心とする調査をおこなった。

そして、2008年度は、中国社会科学院考古研究所や韓国国立中央博物館・国立慶州博物館・韓神大学校ほかの協力のもとで過去3年間に実施した現地調査の成果に基づき、両国の研究協力者を日本に招聘して、奈良文化財研究所で2日間にわたる国際シンポジウムを開催した。

中国に関しては、五胡十六国から南北朝をへて隋唐代までの造瓦技術と地域的特徴およびその変化、さらに元代にいたる変遷の大綱を提示した。一方、朝鮮半島については、高句麗のほか、百済の漢城・熊津・泗沘時代や新羅における造瓦技術の展開をあとづけた。また、中国から朝鮮半島ならびに朝鮮半島から日本への伝播の実相に関するとりまとめもおこなった。

上記の研究成果は、シンポジウムで発表するとともに、成果報告書『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』として刊行・配布し、公開を図った。参加者は2日間で139名に達し、好評を博した。（小澤 毅）

科学研究費等

◆木簡など出土文字資料釈読支援システムの高次化と綜合的研究拠点データベースの構築

代表者・渡辺 晃宏　基盤研究（S）新規

2007年度まで実施してきた「推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発」（基盤研究（S））の成果（木簡釈読支援システム「Mokkanshop」と木簡文字画像データベース「木簡字典」）に基づく新規研究である。

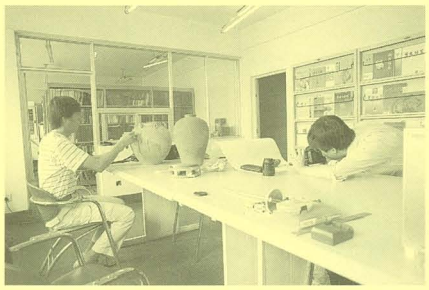
木簡字典を踏まえた知識ベースを構築し、これをMokkanshopを踏まえた地理的・空間的な制約を超えた釈読支援システムに活用する。そしてその成果を再び知識ベースに生かして知の循環を実現し、日本の木簡の7割を調査してきた機関に相応しい研究拠点機能の構築を図るのを目的とする。

2008年度は、Mokkanshopの検索字書拡充とユーザインタフェイスの更改、木簡字典のデータの地域・時代を超えた拡充とその基礎データの蓄積、及びそのリニューアルの準備、別途開発した遺構年代観データベースとの連携、知識データベースとその検索システムの構築、赤外線撮影に適したシステムの開発、東京大学史料編纂所の「くずし字字典データベース」との連携準備作業などをおこなった。

◆日中古代墳墓副葬品の比較研究

代表者・金田 明大　基盤研究（A）継続

中国遼寧省、遼西地域の唐墓から出土した副葬品について、陶俑に施された彩色顔料の分析等も含めて調査、検討をおこなった。日本列島の墳墓副葬品等にみられる渡来系遺物や外来的要素のなかで、中国を源流とすると考えられるものについては、その当時の各地域間における交流のあり方を反映して、直接的な場合と韓半島を経由した場合があることが明らかになった。



随唐墓出土資料調査風景

◆古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究

代表者・山崎 信二　基盤研究（A）継続

本研究は、古代の中国および朝鮮半島と日本の瓦について、それぞれの地域ごとに製作技術の変遷を把握し、国を越えた技術伝播の様相を解明することを目的としている。最終年度にあたる2008年度は、中国と韓国の研究協力者を日本に招聘して、3月14・15日の両日、国際シンポジウム「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播」を開催するとともに、4年間の研究成果を冊子として公表した。

◆遺跡出土の建築部材に関する総合的研究

代表者・島田 敏男　基盤研究（A）継続

2008年度は4カ年計画の3年度目で、全国の出土建築部材データベースの作成を推進するともに、飛鳥・藤原地区出土の建築部材および他遺跡出土の建築部材を調査し、調査を通して出土建築部材の調査手法の検討もおこなった。また、前年度の研究集会での討論結果を受けて、調査マニュアル的な事例集の作成を目指して作業をおこなった。その内容検討のため、全国の研究者および発掘担当者の方々に集まっていただき、研究会を開催した。

◆東アジアにおける家畜の伝播とその展開に関する動物考古学的研究

代表者・松井 章　基盤研究（A）継続

6月にアイルランド国ダブリン大学で開催された世界考古学会議において、世界をかける湿地考古学（Wetland Archaeology Across the World）と題する分科会をアイルランド考古学者と連名で組織し、座長を勤め、日本および中国の発掘成果について発表をおこなった。また、3月にラオス山間部の少数民族の、水道も電気もトイレも無い村に民泊し、焼畑、猪・豚、鶏・赤色野鶏（鶏の野生原種）の調査をおこなった。その期間、豚、犬、鶏と共に過ごし、古代人の生活、斯くありなんの思いを強くした。

◆霊廟建築における荘厳手法の総合的比較研究

代表者・窪寺 茂　基盤研究（B）継続

本研究は、全国各地の霊廟建築を対象とした構造・意匠・装飾技法面の調査研究から、霊廟建築の荘厳に関わる設計理論・手法を明らかにし、当時の建築文化の実像を究明することを目的とした。4年目にあたる2008年度は、最終年度に当たる。本年度は、これまで実施した現地調査の結果を分析する一方、史料調査等を実施して、研究成果を報告書に纏めた。本研究による調査手法・視点、そして成果が、今後の近世社寺建築の研究および文化財の修復になんらかの形で寄与することを期待している

◆打音試験法及びアコースティックエミッション法による石造文化財の劣化診断技術の開発

代表者・高妻 洋成　基盤研究（B）継続

打音試験機の打撃装置に改良を加え、打撃エネルギーの規格化をおこなうことで、強度に関して有効なデータを得ることができるようにした。アコースティックエミッション法を用いた石造文化財の劣化診断技術の開発では、長期間、遠隔地においてモニタリングするためにインターネットを用いる方法を検討した。

◆南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究

代表者・吉川 聡　基盤研究（B）継続

本研究は、南都の古寺社が所蔵してきた歴史資料について、本来伝来した場所から流出した状態で現在保管されている資料群の性格を明らかにする。3年目の2008年度は、引き続き新修東大寺文書聖教の中村準一寄贈文書の調査を続行し、最後まで一通り整理することができた。茶道関係資料などを見いだすことができた。また、明治維新期の日記等を翻刻した。さらに、新修東大寺文書聖教のうち、本来東大寺に伝来していた資料群についても整理を進めた。

◆大極殿院の思想と文化に関する研究

代表者・内田 和伸　基盤研究（B）継続

本研究は大極殿院の発掘調査成果を踏まえ、造営における思想的背景や設計思想などを明らかにし、遺構解釈を深め、脈絡のある遺跡の見せ方や活用のあり方を探るものである。平城宮第一次大極殿院では、宮殿は宇宙を象り、高御座は地上と天空の結節点として「天の御柱」を具現している可能性が高くなった。韓国の慶福宮でおこなわれている「常参議」の再現事業を見学し、宮殿遺跡の活用の参考となった。

◆マイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊年輪年代法による木彫神像の研究

代表者・大河内 隆之　基盤研究（B）　継続

本研究は、マイクロフォーカスX線CT装置を用いて調査対象の断層画像を撮影し、得られた画像をもとに非破壊で年輪年代測定する技術を木造神像彫刻の調査に応用するものである。2008年度は、栗東歴史民俗博物館寄託の神像彫刻群などを奈良文化財研究所に移送し、同法による非破壊年輪年代調査を実施した。また同装置による調査が困難な大型の木彫像については、デジタルカメラで撮影した像表面の画像をもとに年輪年代調査を実施した。

◆日本初期貨幣史の再構築

代表者・松村 恵司　基盤研究（B）新規

本研究は、近年の出土銭貨資料と文献史料を基礎に、わが国の鋳造貨幣の誕生と貨幣制度確立の過程を解明し、新たな視点から貨幣史の再構築を目的とした研究である。3カ年計画の初年度にあたる2008年度は、富本銭と無文銀銭、和同開珎に関する研究史の総括を進めるとともに、平城京出土銭貨の分析をおこない、銭貨の経済外的使用法の淵源について考察した。特に条坊側溝や宮内基幹水路の出土銭貨の分析では、それらが祓えに伴う散銭として使用された可能性が高まり、散米などの代替物としての使用が想定された。また平城京内の鋳銭工房の分析では、各地の鋳銭司へ供給した種銭を生産した官営工房である可能性が浮上した。平成21年3月7・8日の両日に、研究集会「出土銭貨研究の課題と展望」を開催し、弥生・古墳時代から平安時代に及ぶ出土銭貨研究の論点について、多角的な議論をおこなった。また研究集会の記録集「和同開珎をめぐる諸問題（三）」を刊行した。

◆東アジアにおける武器・武具の比較研究

代表者・小林 謙一　基盤研究（C）繰越

新たに公表された資料に基づき、中国に

おける武具の年代観や系譜関係について修正、再検討するとともに、韓国、日本の武具の系譜関係についても再検証した。東アジア各地域における武装の相違は、戦闘方法の違いであり、なかでも、日本では、列島内における戦闘に対処する装備として、外来の要素を導入しつつ、整えられてきた状況が明らかになった。

◆日韓出土土器による３・４世紀国際交流の研究

代表者・次山 淳　基盤研究（C）継続

日本列島の弥生時代終末から古墳時代前期にあたる３・４世紀において、中国大陸・朝鮮半島をはじめとする東アジア諸地域との間にさまざまなかたちの交流があったことは、彼我の多様な考古資料と『魏志倭人伝』等の文献史料の記載からうかがい知ることができる。本研究は、考古資料、なかでも土器を主たる材料として、当時の日本列島と朝鮮半島の交流のありかたを考察しようとするものである。今年度は、日本列島出土の朝鮮半島系土器資料について分布傾向を中心に検討し、対馬・壱岐をのぞく九州以東の西日本において現在までに公表された朝鮮半島系土器資料77遺跡1183点余のデータを掲載した『３・４世紀を中心とする西日本出土朝鮮半島系土器資料集成』を作成した。

◆蓄積型自然放射線量とX線分析による古代ガラス・セラミック材質の考古科学的研究

代表者・降幡 順子　基盤研究（C）継続

古代ガラス・セラミックスの材質調査から、当時の流通・技術伝播や日本国内での材質の変遷を併せて考察していき、当時の産業・技術史的な流れを明らかにしていくことを目的としている

2008年度は流通や伝播を知る一つの方法として、国内の４府県18遺跡から出土した弥生時代後期から古墳時代後期のガラス約1400点について材質の時代的な変遷や加工方法の調査をおこなった。主に紺色の着色材料などに着目して出土遺物の分類をおこない地域的・時代的な変遷に関するデータを得た。イメージングプレートを用いたAR法によるガラス材質の迅速な識別化としては、PSL値の変動が許容される範囲にあるかどうかを検証するために、X線分析結果とのクロスチェックをおこなった。

◆律令国家の国郡制成立過程に関する考古学的研究

代表者・山中 敏史　基盤研究（C）継続

2008年度は、７世紀段階の官衙関係遺跡の発掘調査資料を収集し、掘立柱建物の平面規模・構造・変遷等についてデータベース化を進め、建物規模・構造等の比較検討を進め、前期評段階における頻繁な構造変化の存在を確認した。また、国衙遺跡の初現期は７世紀第四半期に遡る例が見られるが、国衙としての格式を整えた国庁成立時期は８世紀に下ることを再確認した。また、弘福寺領讃岐国山田郡田図にみられる山田郡と香川郡との郡界線比定地などの現地踏査をおこない、評成立における歴史地理的環境について検討した。また、『和名類聚抄』にみえる隣接する郡の共通する名の郷について地図上でその位置を検討し、それらには郡界線を挟んで立地する例が多いことを明らかにし、もともとは地理的に一体の生活圏にあった地域が、郡界線の設定によって人為的に分断され、両郡に故知の郷名を残すことになったことを推察した。

◆文化的資産としての名勝地の概念とその適用に関する基礎的研究

代表者・平澤 毅　基盤研究（C）継続

本研究は、記念物の一類型である「名勝地」について、その概念の具体的資産への適用と保護の在り方を検討するための総括的資料の作成を含む基礎的な研究をおこなうものである。今年度は、資料の収集・整理を進めるとともに、関係機関との協議を通じて把握した全国的な状況について検討を行った。また、４人の専門家とともに「文化的資産としての名勝地に関する座談会」を開催した。

◆青銅製祭器の生産と流通からみた弥生時代の社会変化の研究

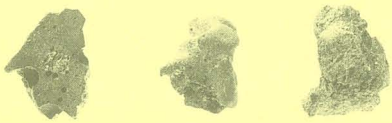
代表者・難波 洋三　基盤研究（C）転入

2008年度は、唐古・鍵遺跡出土の鋳造関係遺物を中心に資料調査をおこなった。その結果、この遺跡では、外縁付鈕２式から扁平鈕式新段階にかけて、一対耳四区袈裟襷文銅鐸が作られたことが明らかになった。この遺跡で作られた銅鐸群は、製作数が少なく中心的な群ではないので、唐古・鍵遺跡での銅鐸生産は一貫して地方的で小規模なものにすぎなかったと評価できる。後に倭王権の中枢となる大和は、弥生時代からすでに他の地域よりも有力であったとする説がある。しかし、2008年度の研究からは、近畿式銅鐸やその成立の核となった銅鐸群がこの遺跡で作られたとの見解は、否定せざるをえない。なお、この研究成果は、本年度末刊行の唐古・鍵遺跡の調査報告書に論文として公表した。

◆古代の鉛調整加工技術に関する考古学的研究

代表者・小池 伸彦　基盤研究（C）新規

本研究は、製品の分析のみでは不明であった古代の中央官営工房における鉛調整・加工技術について究明することを目的とする。すなわち平城宮内の工房における鉛の精錬・精製技術等の有無や内容と変遷過程を明らかにし、７世紀後半あるいは平安時代の鉛関連技術との比較検討を行い、その系譜をたどろうとするものである。2008年度は平城宮東南隅出土冶金関連遺物の再検討を実施した。



平城宮東南隅出土鉛滓

◆東アジアの鉛釉陶器－考古資料にみる鉛釉陶器生産と唐三彩の影響－

代表者・神野 恵　若手研究（B）中断

2008年度はとくに大安寺出土の陶枕について、再整理をおこなった。これらの生産地を考えるうえでの基礎データとして、全点の実測、写真撮影をおこなった。また、大安寺の陶枕は罹災により表面が焼けただれ、文様が不明瞭なものも多いが、これらについてコンピュータＸ線撮影（ＣＲ）をおこない、一部は文様構成を明らかにすることができた。

◆飛鳥藤原出土木簡の資料的検討と官司運営の復元

代表者・市 大樹　若手研究（B）継続

2007年度に引き続き、飛鳥・藤原地域から出土した木簡の資料的検討を進めた。出土したばかりの木簡は、『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報22』、『木簡研究30』で報告した。過去の調査で出土した藤原京木簡2173点は、木簡図録『飛鳥藤原京木簡２－藤原京木簡１』にまとめ、高精細の写真、最新の釈文・解説を提示した。衛門府・右京職の活動を示す木簡が多数あったことから、木簡をもとに官司運営のあり方を検討し、結論の一部は総説に盛り込んだ。

◆古代東アジアにおける火葬習俗の伝播に関する基礎的研究

代表者・小田 裕樹　若手研究（B）継続

研究最終年度にあたる2008年度は研究成

果の発表に重点を置き、大阪歴史学会例会および中国で開催されたSEAA2008大会にて研究報告をおこなった。本研究により、古代東アジアにおける火葬の伝播過程には、①仏教を基層とした伝播と②都城制や「喪葬令」などの律令制度と密接に関わる伝播の二つがあることを見出した。また、その背景として僧侶の活動や当時の国際関係における支配者層の国家意識などが関わっていた可能性が高いと考えた。

◆東アジアにおける文化遺産のオーセンティシティに関する比較研究

代表者・清水 重敦　若手研究（B）継続

最終年度にあたる2008年度は、韓国及び中国における文化遺産の保存に関する現地視察をおこない、口頭発表、学術論文、図書において、日中韓における文化遺産のオーセンティシティに関する考え方の比較成果を報告した。韓国については、ソウル崇礼門（南大門）火災後調査につき、担当者との情報交換をおこない、中国については、山西省北部における歴史的建造物の保存、修復状況の現地視察をおこなった。

◆倉の立地から見た集落構造とその景観文化：群倉型集落を事例として

代表者・黒坂 貴裕　若手研究（B）継続

2008年度は、奄美大島大和村において現存する群倉の調査をおこなった。加えて村内全集落において群倉がかつて所在した場所を聞き取り調査し、立地特性の分析をおこなった。これまでに調査をおこなった地域を併せ、狭隘な集落の土地利用における群倉の位置付け、生業形態との関係性、それぞれの地域特性について明らかにした。こうした成果により、未解明であった群倉について研究を深化させる道筋をつけられた。

奄美大島大和村の群倉

◆古代都城儀式の歴史的変遷にかんする研究

代表者・山本 崇　若手研究（B）継続

本研究は、古代都城の中枢に位置する大極殿とそこでおこなわれる儀式の変遷を、成立から終焉段階までを対象として再検討せんとするもので、『大内裏図考証』（1788年）を超える史料集の完備とそれを踏まえた都城遺跡の活用方法の検討を課題としている。2008年度は、既刊史料集（稿）を補訂する史料収集を続けるとともに、申請者が執筆を担当する大極殿関係刊行物（2010年度刊行）の原稿を作成した。

◆定住民と遊牧民における埋葬体系の比較研究－ヨルダン南部を例として－

代表者・橋本 裕子　若手研究（B）継続

ヨルダン南部、前期青銅器時代（EBI期）の定住民Bab edh-Dhra' 遺跡出土人骨を観察し、EBI期の遊牧民人骨と比較した。本遺跡の人骨は、骨格が極めて頑丈な集団で、特に下肢骨は付柱の形成が著しく、筋肉が強く発達した体格をしていた。当地域のEBI期では定住民は頑丈型、遊牧民は華奢型と大別できる。遊牧民のTal'at Abydahケルン群人骨は、華奢型ながらも下肢の方が筋発達した体格で、定住民と類似する。以上から、同時期・同地域の遊牧民は、埋葬方法や生活様スタイルも多様化しており、また定住民と遊牧民にも類似する生活スタイルがあった可能性が確認できた。

◆銅鏡にみる古代東アジアの文化交流

代表者・中川 あや　若手研究（B）継続

研究２年目にあたる2008年度は、平安時代に日本で主体的に製作された瑞花双鳳八稜鏡の出土資料集成を行うと共に、全国の中でも特に集中して出土している栃木県日光市男体山での資料観察・実測を行い、文様や法量、鋳上がりが非常に多様な鏡群であることを確認した。また、時期的に併行する韓国高麗時代の鏡の様相について研究会で口頭発表した。

◆縄文時代における、縄文原体からみた社会構造変化

代表者・石田 由紀子　若手研究（B）継続

本研究は、縄文土器にほぼ普遍的に存在する施文具である縄文原体の動向から当時の社会構造変化を探るものである。２年目となる2008年度は、昨年度収集した報告書のデータをもとに、中国地方において資料調査を実施した。その結果、中津式期では中期末以来の従来の地域性を保持しつつも、縄文の撚り方向、および太さの上では徐々に周辺地域と一体化していることを確認した。また、研究成果の一部を関西縄文文化研究会で発表した。

◆木簡の構文・文字表記パターンの解析・抽出研究

代表者・馬場 基　若手研究（B）新規

本研究では、個別的・感覚的に指摘されてきた、木簡の構文パターン・表記・形状等の特徴を、数値データによる検討を加え、総合的に整理・抽出し、体系化を試みる。

2008年度は、釈文データにタグを付し、画像上の位置情報と連携させるソフトの開発と、『平城宮木簡』１～６所収木簡のタグ付け準備作業を完了した。

◆弥生・古墳時代における東アジア墳墓出土鉄製武器の比較研究

代表者・豊島 直博　若手研究（B）新規

本研究は、日本の弥生・古墳時代の墳墓から出土する鉄製武器の起源を探るため、中国と朝鮮半島の武器と比較することを目的とする。2008年は研究の初年度に当たり、発掘調査報告書をもとに中国と朝鮮半島の武器を集成した。

さらに、新たな比較研究の視点を探るべく、おもに西日本の古墳から出土した刀剣の資料調査をおこなった。刀剣の国産化について、古墳時代中期が大きな画期であると考えるに至った。

◆古代工房の復原的比較研究－埴輪・須恵器・瓦の工房を中心に－

代表者・城倉 正祥　若手研究（B）新規

本研究は、工具痕分析を武器として埴輪・須恵器・瓦の工房を具体的に復原し、古墳社会から律令国家成立に向けての主工業生産の発展を通時的に位置付けることを目的とする。今年度は主に関東地方を中心に埴輪・須恵器の分析をおこなった。その成果の一部は、「北武蔵における埴輪生産の成立と展開」『古代文化』第60巻第１号に論文として、また『埴輪生産と地域社会』学生社に単著としてまとめた。

◆古代中世東アジアにおける八角塔・八角堂の構造と意匠に関する研究

代表者・箱崎 和久　若手研究（B）新規

2008年度は日本を中心に八角堂・六角堂の資料収集をおこなった。群馬県伊勢崎市の三軒屋遺跡で近年発見された７世紀後半～９世紀の八角建物は、正八角形でない総柱の平面をもち、現存建物に見られない形式だが、寄棟造の校倉と考えられる。現存する中世までの多角形堂のうち、各辺に直交する組物を挺出させるのは、輪蔵を含めると禅宗様系の４件だが、安楽寺八角三重塔を除けば、構造と関係のない見せかけの組物となる。

◆近世建造物の年代測定を目指した日本産ツガ属の年輪年代学的研究

代表者・藤井 裕之　若手研究（B）新規

ツガ（トガ・栂）は古建築の用材としておなじみの木であるばかりでなく、年輪年代法の対象として有望視されてきた樹種でもある。本研究では国産のツガ類における年輪年代法の実用化をめざし、基礎的事項の整理と解明をすすめている。2008年度は現生木の収集を図りつつ、複数の近世建造物で部材の年輪を計測。パターンの同調性などを検討した。

◆南都諸大寺の中世寺院への転成過程に関する建築史学的研究

代表者・大林 潤　若手研究（B）新規

本研究は、平城京の諸大寺が中世南都の諸寺院へと変遷していく過程を検討するもので、主に伽藍配置や建築の性格を対象に、建築史学的方法と、発掘調査による知見、文献史料の検討をおこなうことを課題とする。2008年度は南都緒寺院の発掘調査資料を収集し、データベース化作業を進行している。

◆近代日本における洋風庭園の様式形成過程と空間デザインに関する研究

代表者・粟野 隆　若手研究（B）新規

本研究は明治・大正・昭和前期における洋風庭園の様式形成過程と空間デザインを系統的に整理することを目的とする。本年度は、近代に刊行された雑誌、絵葉書、写真帖などを中心に、洋風庭園に関連する史資料類を収集・整理した。また、近代の外国人居留地のひとつである函館、長崎の洋風庭園の現地調査を実施した。以上の成果は、奈文研公開講演会や京都造園懇談会等の研究会で報告した。

◆加飾壺の成立・展開からみた古墳祭祀の創出過程

代表者・廣瀬 覚　若手研究（スタートアップ）継続

2007年度の西日本地域に引き続き、2008年度は東日本地域を中心に加飾壺および関連資料の集成を実施し、全国的な資料集成がほぼ完了した。これに基づいて、加飾壺の型式分類を再検討し、遺跡（古墳）ごとの出土状況を整理した。また、瀬戸内地域を中心に、出土資料の見学調査を実施し、加飾壺の地域的展開の具体相について考察を深めた。

◆動物遺存体に残された解体痕跡の基礎的研究

代表者・山崎 健　若手研究（スタートアップ）新規

本研究は、遺跡出土の動物遺存体に残された痕跡から、その利用目的や解体方法という動物資源利用の実態を論じていくことを目的とする。

初年度である2008年度は、北海道でエゾジカ猟に帯同して解体行動の調査をおこなった。そして、解体されたエゾジカの骨格標本を製作し、解体行動とその結果として骨に残された痕跡との相関関係を明らかにした。研究成果の一部については、考古学協会や動物考古学研究集会において発表した。

雪中でのエゾジカ解体

◆更新世末期の社会変化の研究

代表者・国武 貞克　若手研究（スタートアップ）新規

本研究は、旧石器時代の移動生活を基本としたバンド社会から、縄文時代の定住生活を基本とした部族社会に至る社会変化を、居住形態の変化を追跡する視点から解明することを目的としている。2008年は、関東地方の旧石器時代の主要な石材産地である栃木県高原山黒曜石原産地遺跡の発掘調査をおこない、縄文時代草創期の大型の槍先形尖頭器の製作址を検出し、良好な資料を入手した。また関東地方の主要な旧石器時代遺跡から出土した黒曜石製石器の産地分析をおこない、石材獲得活動の通時的な変遷を分析するための基礎資料を得た。

◆東大寺の成立過程の研究

代表者・児島 大輔　特別研究員奨励費　継続

本研究は、日本美術における古典の形成期と重なる東大寺の成立過程を明らかにすることを目的とする。本年度は東大寺、山口・阿弥陀寺等の木彫仏の年輪年代測定をおこなったほか、奈良時代の仏教美術作品と統一新羅期の作例との比較検討および東大寺盧舎那仏に献納された正倉院宝物の研究を中心におこなった。成果として木彫仏の年輪年代測定結果、正倉院宝物袈裟に関する論文を発表した。

◆目録学の構築と古典学の再生－天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明－

代表者・東京大学史料編纂所教授　田島 公（渡辺晃宏）　学術創成研究費　継続

研究補助ツールの充実の一つとして、『日本古代人名辞典』の増補・改訂のための「木簡人名データベース」の構築などを担当している。

奈文研木簡データベースからデータを抽出し、2007年度開発した人名データベース作成ツールにより編集を開始した。

抽出項目に加え、木簡表記、項目名、よみ、氏・名、説明、遺構年代、書籍版巻・頁などの項目を新たに作成している。このうち、遺構年代については、報告書などに基づく「木簡出土遺構年代観データベース」を作成し、今後連携を図る予定である。

なお、名寄せの結果、1万人程度の古代人名を立項できるとの見通しを得た。

（渡辺晃宏・古藤真平）

◆徳川将軍親族遺体のデジタル保存と考古学的・人類学的分析－大奥の実態に迫る－

代表者・独立行政法人国立科学博物館・人類研究部名誉研究員　馬場 悠男（松井 章）基盤研究（B）新規

寛永寺の谷中墓地の改修に伴い、発掘された徳川将軍家、特に大奥関係の埋葬者の研究を科学博物館の人類研究部と共同でおこなっている。5月には発掘中の谷中墓地を訪問し、遺存状態、副葬品などを観察し、科学博物館にて打ち合わせの後、取りあげられた遺骨に付着した土壌サンプルを採取した。好評のNHKの大河ドラマ「篤姫」にゆかりの人物の名前や実際の遺骨もあり、今後の研究の進展が楽しみである。

学会・研究会等の活動

◆埋蔵文化財写真技術研究会

2008年7月4・5日に第20回総会および研究会をおこなった。

7月4日：総会　参加者84名（含委任状）・講演　参加者61名「光を見る ～自然の光～鎌倉大仏」（井上久美子氏；神奈川県立博物館）
講演「研究会20周年によせて」（佃 幹雄氏；研究会顧問）（牛嶋　茂　；研究会会長）

7月5日：参加者58名・発表「デジタル文化財写真へのみちすじ」（研究会デジタル部会）
講演「デジタルメディアの耐久性について」（野島 悟氏；パルステック工業）

講演「ポジフィルムからのモノクロ印刷」（宮内康弘氏；岡村印刷工業）

第20回の総会は役員改選にあたり、勝田 徹新会長を選出した。幹事など執行部体制も一新して若返りを図った。

一日目の講演は井上久美子氏による鎌倉大仏の撮影についての講演をいただいた。会場後方には井上氏の大仏写真を展示し、ミニ写真展とし、会場に花を添えた。

二日目は研究会としての方針転換を示すデジタル部会の発表「デジタル文化財写真へのみちすじ」と題した部会発表をおこなった。部会では参加者持ち込みのDSC解像度テストもおこなった。午後からはメディアの耐久性や白黒印刷の現状などこれまでの認識を改めて考え直させられる講演を野島氏・宮内氏からいただいた。

研究会も20回の節目を過ぎ、新しい体制・スタンスで今後の文化財写真を担うことが出来る存在で有り続けたいと考えている。　（中村 一郎）

◆日本遺跡学会

「遺跡と地域コミュニケーション」をテーマに、2008年11月29・30日に日本遺跡学会2008年度大会をおこなった。初日は平城宮跡資料館で木下剛氏が「英国における遺跡の保全と地域コミュニティの役割」と題する基調講演をし、山中鹿次「歴史遺産を活用したランニング大会の動向と課題」、佐藤晃一「遺跡整備・町並み保存からみえるもの」、持永正夫「語り継ぐ地域遺産－秩父全体を博物館に－」、本吉春雄「遺跡を活用した地域おこし－オホーツクの古代遺跡と博物館を訪ね体験するたび－」、山下史朗「遺跡と人と地域をつなぐ－兵庫県立考古博物館の取り組み－」と、各氏からの報告があり、総合討論をおこなった。二日目は、朝日新聞との共催で「平城宮跡の国営公園化と奈良のまちづくり」と題するシンポジウムを奈良大学講堂でおこなった。行政担当者からの基調報告があり、パネリスト5名によるパネル討論をおこなった。　（内田 和伸）

◆木簡学会研究集会

2008年12月6・7日、第30回木簡学会総会・研究集会を平城宮跡資料館講堂において開催した（参加者179名）。6日は総会後、「歌木簡とその周辺」と題して、近年注目を集める万葉歌木簡を総合的に検討した。宮町遺跡（鈴木良章氏〈甲賀市教育委員会〉・栄原永遠男氏〈大阪市立大学〉）、石神遺跡（森岡隆氏〈筑波大学〉）、馬場南遺跡（伊野近富氏〈（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター〉）の万葉歌木簡の事例紹介と、これをめぐる3本の研究報告（犬飼隆氏〈愛知県立大学〉「木簡に「歌」を書くこと」、乾善彦氏〈関西大学〉「歌表記の仮名使用」、鈴木景二氏〈富山大学〉「仮名木簡と墨書土器」）により、新しい木簡の世界を開くことができた。

7日は山本崇「2008年全国出土の木簡」で木簡出土状況を概観した後、前岡孝彰氏（但馬国府国分寺館）による兵庫県豊岡市祢布ヶ森遺跡（但馬国府推定地）出土木簡の報告と、同詩経木簡に関する多田伊織氏（皇學館大学）の補足報告、鈴木敏則氏（浜松市教育委員会）による静岡県浜松市鳥居松遺跡出土木簡の報告があった。なお、会誌『木簡研究』第30号を編集・刊行した。（担当：馬場 基）

（渡辺 晃宏）

◆条里制・古代都市研究会

2009年3月7日・8日の両日、第25回条里制・古代都市研究会大会が、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂においておこなわれた。1日目は「聖武の造営した宮都」をテーマに、小笠原好彦氏「聖武と都城の造営」、森下衛氏「恭仁宮跡の発掘調査」、佐藤隆氏「後期難波宮をめぐる諸問題」、鈴木良章氏「紫香楽宮をめぐる諸問題」、渡辺晃宏「前期平城宮から後期平城宮へ」の報告がおこなわれた。翌日は、藤原宮跡、高松市屋島城跡、宮城県東山官衙遺跡群、秋田県払田柵跡と周辺条里、ベトナム・ハノイ・タンロン皇城遺跡に関する最新の調査研究成果が報告された。

（山本 崇）

文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への指導・助言・協力等

●平城宮跡の整備

平城宮跡の整備について、文化庁および文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官付平城宮跡整備事務所に対し、指導・助言をおこなった。最大の事業である第一次大極殿正殿復原事業については、設計・施工・監理業務に関して協力をおこなっている。2008年は、設計については、扁額の復原研究をおこなうとともに、内外の研究者による扁額検討会を開催し、扁額の復原設計に対して協力をおこなった。同時に、現在進行中の施工にかかる指導を随時おこなった。また、2008年９月20日～９月23日に文化庁主催で開催された、第一次大極殿正殿復原工事現場見学会に協力をおこなった。

なお、第一次大極殿は2009年３月現在、棟には金色の鴟尾と大棟中央飾りがあがり、主要な工事はほぼ完了した。2009年春からは大極殿を覆っている素屋根の解体が始まり、秋頃にはいよいよその雄姿が現れる予定である。素屋根の解体後は、壁の仕上げ・彩色や設備工事等、最終的な仕上げ作業がおこなわれる。秋からは、内部の小壁（上部の壁）に、天井に描かれた蓮の花の原画を描いていただいた日本画家の上村淳之先生の手自らによって、四神および十二支が描かれる。そして、2010年春には完成する予定である。

また、平城宮跡の国営公園化にともない、今後整備事業を推進する国営飛鳥歴史公園事務所に対しても、整備計画策定等について資料提供および助言をおこない、協力をおこなっている。　（島田 敏男）

●高松塚古墳仮整備のための発掘調査

2007年度に実施した石室解体事業に引き続き、仮整備の資料収集を目的とした発掘調査を、平成20年７月１日から21年２月13日まで、文化庁の委託事業として実施した。調査の対象は古墳の南半部で、築造時に造成された基盤面の南端と墳丘ならびに丘陵斜面の関係を明らかにし、墳丘の裾をめぐる周溝の南面の状況を確認することに調査の主眼を置いた。また、仮整備事業で昭和49年に建設された保存施設を撤去することになったため、撤去工事の立会をおこない、施設撤去後に墓道部壁面の再調査を実施した。

墳丘南東部の調査では、墳丘裾をめぐる幅2.8～４ｍの周溝を検出し、直径23ｍの円墳とした平成16年度の墳丘復元案の妥当性を追認した。周溝の南端は、丘陵下に広がる谷水田の造成時に大きく削り取られていたが、その開削面で、周溝に注ぐ石詰め暗渠を発見した。石詰め暗渠は、石室をはさんで東西対称の位置にあり、石室の周囲にコの字型に配置されている模様。墳丘南西斜面では、大規模な地滑りの跡を発見するとともに、古墳本来の形状が失われていることを確認した。また、開削面で、古墳築造時に埋め立てられた谷の存在を確認し、古墳の築造に際して、大規模な地形の改変と造成がおこなわれている事実を明らかにした。

以上のように、今回の調査では、古墳築造時の南面の姿を明らかにすることはできなかったが、古墳の残存状況が明らかになるとともに、旧地形や古墳の築造工程に関する貴重な資料を得ることができた。　（松村 恵司）

完成した二重の屋根（撮影日：平成20年12月１日）

南東部調査区全景

●キトラ古墳出土遺物の調査研究

キトラ古墳関係の事業では、石室内外より発掘調査によって出土した遺物に対して、分析と保存処理、および展示活用のための作業を進めた。

石室内から出土した琥珀玉に関しては、産地等の分析を引き続き進めるとともに、劣化が著しいものに対して保存修復をおこなった。また、刀装具は復原品の作成を行い、展示活用に備えた。

石室内外より出土し、保存処理が完了した石室石材破片については、接合と修復作業を行い、石室南壁の欠損部分として復原した。石室内面にあたる部分には、漆喰が残存している箇所がそのまま見られる。また、西壁との接合部の面取りもよく観察できる。これは仮設保護覆屋内で管理され、一般の人には見ることのできない石室の実物資料として、展示活用の重要な材料である。これに関しては記者発表をおこない、藤原宮跡資料室で公開した。（玉田 芳英）

発掘調査現地説明会・見学会

◆2008年6月7日（土）

平城第431次（平城宮第一次大極殿院南面回廊）発掘調査

都城発掘調査部（平城地区）考古第二研究室　森川 実

参加者人数：807人　調査面積：630㎡

◆2008年6月30日（月）～7月2日（水）

飛鳥藤原第153次（藤原宮朝堂院朝庭）発掘調査の現場公開

参加者人数：965人　調査面積：約1,650㎡

◆2008年9月27日（土）

飛鳥藤原第153次（藤原宮朝堂院朝庭）発掘調査

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）考古第二研究室 小田 裕樹

参加者人数：953人　調査面積：約1,650㎡

◆2008年9月28日（日）

平城第432次・436次（平城宮第一次大極殿院西面回廊）発掘調査

都城発掘調査部（平城地区）考古第一研究室　和田 一之輔

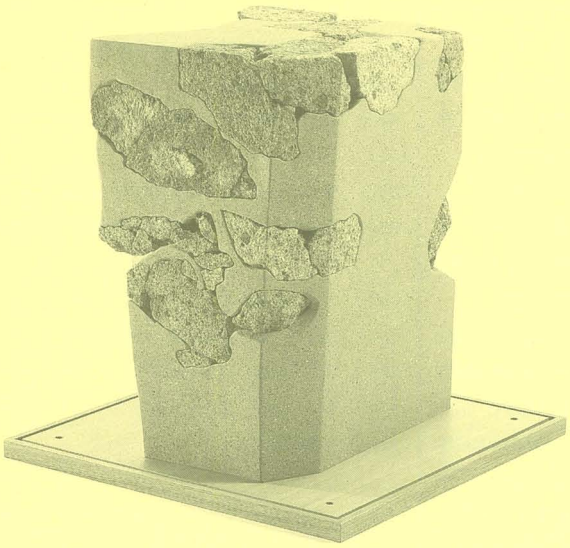
参加者人数：728人　調査面積：936㎡（432）、880㎡（436）

◆2009年2月14日（土）

飛鳥藤原第156次（石神遺跡第21次）発掘調査

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）考古第一研究室　青木 敬

参加者人数：1,611人　調査面積：480㎡



キトラ古墳盗掘孔

2 研修・指導と教育

埋蔵文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上をはかるため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2008年度は、一般研修1課程、専門研修13課程の合計14課程の研修を開催した（2008年度埋蔵文化財担当者研修課程の一覧参照）。研修の多くは、講義を主体としたものであるが、遺物の診断調査（X線撮影・分析）から保存修理に至る過程について、一貫した実習を取り入れた研修なども好評であった。研修総日数139日、研修生総数170名であった。一般研修については、2008年度をもって廃止する予定である。

企画調査部及び各研究部局では、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存修理、遺跡の保存、遺跡整備等に関しての指導、助言等の協力をおこなっている。2008年度の主な指導・協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、各公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ遺物の材質・構造調査や遺跡の保存環境調査、遺跡の保存整備に関する調査、年輪年代測定などの受託研究や共同研究も進めている。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻－文化・地域環境論講座の文化遺産学分野の客員教員として6名（山中敏史・松村恵司・窪寺茂・肥塚隆保・松井章・大河内隆之）が、それぞれ修士課程の環境考古学論・文化遺産学演習及び文化・地域環境基礎論等を担当し、博士後期課程では、全員が共生文明学特別研究や文化遺産学特別演習を担当した。

授業では、都城・寺院・官衙・集落遺跡を対象とした考古学や、建築史学、年輪年代学、保存科学、環境考古学などの講義・演習・実習等をおこない、各分野所属の院生（修士課程2名、博士後期課程9名）の教育指導にあたった。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教員として、小林謙一（客員教授）、次山淳（客員准教授）及び渡邉晃宏（客員教授）がそれぞれ、「日本考古学の諸問題」、「歴史考古学特論」、「歴史資料論」を担当し、博士後期課程の大学院生の指導をおこなった。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡などの遺跡の発掘調査、瓦や土器、木製品、木簡をはじめとする遺物の調査研究に密着した授業であり、大学における通常の授業では経験できない、奈文研ならではの特色ある教育を実践した。

2008年度　日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧　（委員の委嘱を受けているもの）

（岩手）	志波城跡　平泉遺跡群
（宮城）	多賀城跡
（福島）	宮畑遺跡
（栃木）	馬屋久保遺跡　上神主・茂原官衙遺跡　長者ヶ平官衙遺跡附東山遺跡　高原山黒曜石原産地遺跡群
（群馬）	三軒屋遺跡　上野国新田郡庁跡
（茨城）	常陸国衙跡　水戸市史跡等
（神奈川）	下寺尾七堂伽藍跡
（長野）	塩尻市伝統的建造物群　柳沢遺跡
（岐阜）	恵那市伝統的建造物群　関ヶ原古戦場
（静岡）	新居関跡　遠江国分寺跡
（愛知）	名古屋城跡　歴史の里
（三重）	伊勢国府跡・伊勢国分寺跡　斎宮跡　亀山市伝統的建造物群　諸戸氏庭園
（滋賀）	大津市伝統的建造物群　下之郷遺跡　多賀神社奥書院庭園
（京都）	恭仁宮跡　井手町内遺跡　京都府近代和風建築　本願寺御影堂厨子　大覚寺　元離宮二条城建造物　長岡宮跡　宇治川太閤堤遺跡
（大阪）	新堂廃寺等　百済寺跡　和泉黄金塚古墳
（兵庫）	法隆寺領播磨国鵤荘史跡　新宮宮内遺跡　茶すり山古墳　池田古墳　和田岬砲台　山陽道野磨駅家跡　大中遺跡　三ツ塚廃寺跡
（奈良）	旧大乗院庭園　平城京左京三条二坊宮跡庭園　中宮寺跡　巣山古墳　橿原市伝統的建造物群　大安寺旧境内　森家住宅　赤土山古墳　宇陀市松山地区伝統的建造物群　五條市伝統的建造物群
（和歌山）	熊野古道藤白坂　紀伊風土記の丘
（鳥取）	妻木晩田遺跡　伯耆古代の丘　栃本廃寺跡　青谷上寺地遺跡
（島根）	山城郷北新造院跡　医光寺庭園
（広島）	府中市備後国府跡
（岡山）	第二次山陽遺跡　備中松山城跡
（山口）	下関市史跡
（徳島）	阿波国分尼寺跡　藍住町勝端城館跡
（香川）	丸亀城跡　快天山古墳　屋嶋城跡　中寺廃寺跡
（愛媛）	久米官衙遺跡群
（福岡）	大宰府史跡　鴻臚館跡　三雲遺跡等
（佐賀）	天狗谷窯跡　東名遺跡群
（長崎）	原の辻遺跡　鷹島海底遺跡
（大分）	名勝耶馬渓

2008年度 埋蔵文化財担当者研修課程一覧

区分	課程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修日数	申込者数	受講者数
一般研修	遺物観察調査課程	8月18日～9月12日	12名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、発掘調査の経験が十分でない者	各種の遺物調査に必要な基礎的知識と技術の研修	遺跡・調査技術研究室	26日	12名	12名
専門研修	保存科学Ⅰ（無機質遺物）課程	5月13日～5月21日	10名	地域の中核となる地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	遺物・遺構の保存科学的な調査法および保存修復修理に関する基礎知識と技術の習得を目指す研修	保存修復科学研究室	9日	6名	6名
	保存科学Ⅱ（有機質遺物）課程	5月21日～5月29日	10名	〃	遺物・遺構の保存科学的な調査法および保存修復修理に関する基礎知識と技術の習得を目指す研修	保存修復科学研究室	9日	9名	9名
	掘立柱建物・礎石建物遺構調査課程	6月9日～6月13日	12名	〃	古代の掘立柱建物・礎石建物遺構の調査に関して必要な専門的知識と技術の研修	文化遺産部	5日	13名	13名
	文化財写真Ⅰ（基礎）課程	7月7日～7月23日	10名	〃	埋蔵文化財調査における写真業務のうち、高品質な写真資料作成に必要な知識と観察眼を白黒暗室処理実習を中心に習得する研修	写真室	17日	9名	9名
	文化財写真Ⅱ（応用）課程	7月23日～8月6日	10名	〃	埋蔵文化財調査における写真業務のうち、撮影から写真プリント制作までの実習を通して資料写真制作に必要な知識と技術を習得する研修	写真室	15日	6名	6名
	鉄製武器類調査課程	10月6日～10月10日	10名	〃	弥生時代から奈良、平安時代にかけての鉄製武器類の調査研究に必要な専門的知識の研修	考古第一研究室	5日	13名	13名
	遺跡測量課程	10月20日～10月31日	12名	〃	遺跡の測量に必要な専門的知識と技術の研修	遺跡・調査技術研究室	12日	5名	5名
	遺跡地図情報課程	11月18日～11月21日	16名	〃	埋蔵文化財の調査研究へのＧＩＳの応用に関する基礎的知識の研修	文化財情報研究室	4日	15名	15名
	自然科学的年代決定法課程	12月1日～12月5日	12名	〃	年輪年代法とC14年代測定法を中心とする、自然科学的手法による年代測定に関する専門的知識と技術の研修	年代学研究室	5日	6名	6名
	中近世城郭調査整備課程	12月11日～12月18日	20名	〃	中近世城郭の調査研究と整備に関して必要な専門的知識の研修	景観研究室	8日	31名	29名
	報告書作成課程	1月14日～1月23日	16名	〃	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修	企画調整室	10日	23名	23名
	寺院遺跡調査課程	2月2日～2月6日	12名	〃	寺院遺跡の調査に関して必要な専門的知識と技術の研修	文化遺産部	5日	16名	16名
	生物環境調査課程	2月17日～2月25日	12名	〃	環境考古学の基幹を構成する生物環境分野の最新の研究法と、その成果についての専門的知識と技術の研修	環境考古学研究室	9日	9名	8名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「キトラ古墳壁画十二支－子・丑・寅－」

2008年4月18日～6月22日

2008年度はキトラ古墳壁画の十二支獣頭人身像のうち、保存状態の良い、子・丑・寅の3体を、5月9日から25日まで展示し、春期特別展として、十二支に関する標記の展示を行った。記念講演会は文化庁主催で、5月17日に「キトラ古墳の壁画をめぐる諸問題」と題しておこなった。

◆夏期企画展示「飛鳥古寺巡礼」

2008年8月1日～8月31日

夏期企画展示は「飛鳥古寺巡礼」と題して、8月1日から8月31日までの間、飛鳥の古寺の最近のたたずまいの様子を写真で展示した。

◆秋期特別展示「まぼろしの唐代精華－黄冶三彩窯の考古新発見－」

2008年10月17日～12月7日

秋期特別展示は「まぼろしの唐代精華－黄冶三彩窯の考古新発見－」と題して、10月17日から12月7日まで展示をおこなった。本展は、これまで研究所においておこなってきた、河南省文物考古研究所との国際共同研究の成果発表の場として計画した。河南省文物考古研究所から、唐三彩を中心とする90点余りの遺物を拝借して展示を行い、期間中の10月18日にシンポジウムをおこなった。

◆冬期企画展示「飛鳥の考古学 2008」発掘調査速報展

2009年2月3日～3月1日

冬期企画展示では、例年行っている飛鳥の発掘成果展である「飛鳥の考古学 2008」発掘調査速報展を、2月3日から3月1日までおこなった。

平城宮跡資料館の展示

通年の常設展のほかに、以下のような特別企画展1件、速報展2件、合計3件の展示を実施した。

◆特別企画展「地下の正倉院展－長屋王家木簡の世界」

2008年10月21日～11月30日

長屋王家木簡の発掘20周年を機に、木簡約60点を展示した。展示内容は全期間を通して、5つのテーマ(「長屋王とその家族」、「長屋王家を支える人々」、「長屋王と食卓」、「長屋王家の経済基盤」、「長屋王家木簡と日本語」)にわけ、2週間ごとに、展示替え、およびギャラリートーク（10月26日、11月9日、11月23日）を実施した。

◆速報展「平城宮東院地区中枢部の調査(平城第423次)」

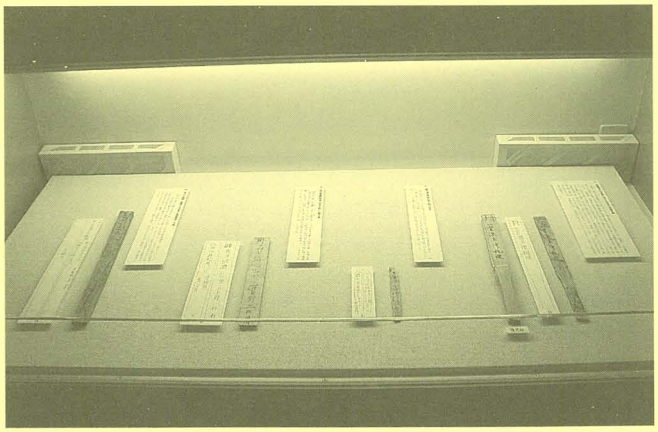
2008年4月22日～5月25日

現地説明会（2008年1月19日）以降の調査検討の成果について、遺跡写真パネル、遺構図面、出土土器・瓦などにより展示した。

◆速報展「平城宮東方官衙地区の調査(平城第429次)」

2008年7月1日～8月31日

現地説明会（2008年3月30日）以降の調査検討の成果について、遺跡写真パネル、遺構図面、灯明皿・唐草文鬼瓦などの出土品、木簡写真などで展示した。



特別企画展「地下の正倉院展－長屋王家木簡の世界」

2008年度　入館者数

飛鳥資料館（有料）＊観覧料の詳細は61頁	平城宮跡資料館（無料）	合　計
84,608人	92,597人	177,205人

解説ボランティア事業

平城宮跡を訪れる観光客に案内や解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

ボランティアの募集はこれまでに4回おこなわれ、2009年3月31日現在128名（1期生45名、2期生20名、3期生37名、4期生26名）が登録されている。ボランティアに登録された者は所定の研修を受けた後、各人概ね月2～3日の活動をおこなっている。

2008年度は、1日当り7～10名が毎日（休館日をのぞく）、平城宮跡資料館、遺構展示館、東院庭園、朱雀門、第一次大極殿復原工事現場の公開施設等を拠点に、延べ8万3千余名に解説をおこなった。

この解説ボランティア事業は、文化庁の「文化ボランティア通信」をはじめマスコミ、奈良県のＨＰ、観光情報誌等に何度も採り上げられ、熟達した高度な文化解説に来訪者からのお礼の手紙が多く寄せられている。

また、ボランティアの高い学習意欲と熱意により、「ボランティアだより」を作成している。

奈良文化財研究所は、ボランティア全員に活動着を配布するほか、ボランティアの知識向上に資するために、に、研究所員による速報展等の説明会や学習会を開催する等、積極的な支援をおこなっている。

2008年度　平城宮跡解説ボランティア活動状況

ボランティア活動のべ人数	解説を受けた来訪者のべ人数			
	団体		個人	計
	学生	一般		
2,530	27,302	19,171	37,012	83,485

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料のナショナルセンターとなるべく、歴史・考古学分野をはじめ、巾広く文化財関係の書籍及び写真資料を収集している。また、本庁舎図書資料室は一般公開施設と位置づけて公開しており、所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌及び展覧会カタログ等の閲覧・複写のサービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて複写サービスを実施している。

また、研究所の刊行物についても、機関リポジトリを作成し、画像データとしてインターネット公開をおこなっている。

＜データベース＞

本研究所では、文化財情報の電子化をおこない、文化財関係の各種データベースを継続的に作成している。公開するデータベースは全てWebブラウザでの検索及び閲覧が可能で、2008年度は49万3千件のアクセスを得ている。

公開データベース一覧	2008年度アクセス件数
木簡データベース	21,111
木簡画像データベース【木簡字典】	37,194
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	1,238
軒瓦データベース	1,591
遺跡データベース	18,232
地方官衙関係遺跡データベース	1,661
古代寺院遺跡データベース	65
官衙関係遺跡整備データベース	917
斜面保護データベース	748
発掘庭園データベース	1,281
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	1,122
OPAC（所蔵図書データベース）	262,409
報告書抄録データベース	4,852
薬師寺典籍文書データベース	994
大宮家文書データベース	503
学術情報リポジトリ	139,129
合　計	493,047

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所学報

第１冊　仏師運慶の研究（1954）
第２冊　修学院離宮の復原的研究（1954）
第３冊　文化史論叢（1955）
第４冊　奈良時代僧房の研究（1956）
第５冊　飛鳥寺発掘調査報告（1957）
第６冊　中世庭園文化史（1958）
第７冊　興福寺食堂発掘調査報告（1958）
第８冊　文化財論叢Ⅰ（1959）
第９冊　川原寺発掘調査報告（1959）
第10冊　平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告（1960）
第11冊　院の御所と御堂 － 院家建築の研究 －（1961）
第12冊　巧匠安阿弥陀仏快慶（1962）
第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察（1962）
第14冊　唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究（1962）
第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ
官衙地域の調査（1962）
第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ
内裏地域の調査（1963）
第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ
官衙地域の調査２（1965）
第18冊　小堀遠州の作事（1965）
第19冊　藤原氏の氏寺とその院家（1967）
第20冊　名物裂の成立（1969）
第21冊　研究論集Ⅰ（1971）
第22冊　研究論集Ⅱ（1973）
第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ
平城京左京一条三坊の調査（1974）
第24冊　高山 － 町並調査報告 －（1974）
第25冊　平城京左京三条二坊（1975）
第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ
内裏北外郭の調査（1975）
第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ（1975）
第28冊　研究論集Ⅲ（1975）
第29冊　木曽奈良井－町並調査報告－（1975）
第30冊　五條－町並調査の記録－（1976）
第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ（1977）
第32冊　研究論集Ⅳ（1977）
第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告（1977）
第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ
宮城門・大垣の調査（1977）
第35冊　研究論集Ⅴ（1978）
第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ（1978）
第37冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ（1979）
第38冊　研究論集Ⅵ（1979）
第39冊　平城宮発掘調査報告Ⅹ
古墳時代Ⅰ（1980）
第40冊　平城宮発掘調査報告ⅩⅠ
第一次大極殿地域の調査（1981）
第41冊　研究論集Ⅶ（1984）
第42冊　平城宮発掘調査報告ⅩⅡ
馬寮地域の調査（1984）
第43冊　日本における近世民家（農家）の系統的発展（1984）
第44冊　平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告（1985）
第45冊　薬師寺発掘調査報告（1986）
第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書（1988）
第47冊　研究論集Ⅷ（1988）
第48冊　年輪に歴史を読む
－日本における古年輪学の成立－（1990）
第49冊　研究論集Ⅸ（1990）
第50冊　平城宮跡発掘調査報告書ⅩⅢ
内裏の調査Ⅱ（1990）
第51冊　平城宮跡発掘調査報告書ⅩⅣ
平城宮第二次大極殿院の調査（1992）
第52冊　西隆寺発掘調査報告書（1992）
第53冊　平城宮朱雀門の復原的研究（1993）
第54冊　平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告
－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－（1994）
第55冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ
－ 飛鳥水落遺跡の調査 －（1994）
第56冊　平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告（1997）
第57冊　日本の信仰遺跡（1998）
第58冊　研究論集Ⅹ（1999）

第59冊　中世瓦の研究(1999)
第60冊　研究論集XI(1999)
第61冊　研究論集XII
　　長屋王家・二条大路木簡を読む(2000)
第62冊　史跡頭塔発掘調査報告(2000)
第63冊　山田寺発掘調査報告(2001)
第64冊　研究論集XIII
　　中国古代の葬玉(2001)
第65冊　文化財論叢III　奈良文化財研究所
　　創立五十周年記念論文集(2002)
第66冊　研究論集XIV
　　東アジアの古代都城(2002)
第67冊　平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
　　旧石器時代編[法華寺南遺跡](2002)
第68冊　吉備池廃寺発掘調査報告
　　百済大寺跡の調査(2002)
第69冊　平城宮発掘調査報告XV
　　東院庭園地区の調査(2002)
第70冊　平城宮発掘調査報告XVI
　　兵部省地区の調査(2004)
第71冊　飛鳥池遺跡発掘調査報告(2004)
第72冊　奈良山発掘調査報告I
　　石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査(2004)
第73冊　タニ窯跡群A6号窯発掘調査報告書
　　－アンコール文化遺産保護共同研究報告集－(2004)
第74冊　古代庭園研究I(2005)
第75冊　研究論集XV
　　中国古代の銅剣(2006)
第76冊　法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告(2006)
第77冊　日韓文化財論集I(2007)
第78冊　近世瓦の研究(2008)
第79冊　平城宮第一次大極殿研究1　基壇・礎石編(2008)
第80冊　平城宮第一次大極殿研究4　瓦・屋根編(2008)

奈良文化財研究所史料

第1冊　南無阿弥陀仏作善集(複製)(1951)
第2冊　西大寺叡尊伝記集成(1953)
第3冊　仁和寺史料　寺誌編一(1963)
第4冊　俊乗房重源史料集成(1964)
第5冊　平城宮木簡一　図版・解説(1966・1969)
　　(平城宮発掘調査報告V)
第6冊　仁和寺史料　寺誌編二(1967)
第7冊　唐招提寺史料第一(1970)
第8冊　平城宮木簡二　図版・解説(1974・1975)
　　(平城宮発掘調査報告VIII)
第9冊　日本美術院彫刻等修理記録I(1974)
第10冊　日本美術院彫刻等修理記録II(1975)
第11冊　日本美術院彫刻等修理記録III(1976)
第12冊　藤原宮木簡一　図版・解説(1977)
第13冊　日本美術院彫刻等修理記録IV(1977)
第14冊　日本美術院彫刻等修理記録V(1978)
第15冊　東大寺文書目録第一巻(1978)
第16冊　日本美術院彫刻等修理記録VI(1979)
第17冊　平城宮木簡三　図版・解説(1979)
第18冊　藤原宮木簡二　図版・解説(1979)
第19冊　東大寺文書目録第二巻(1979)
第20冊　日本美術院彫刻等修理記録VII(1980)
第21冊　東大寺文書目録第三巻(1980)
第22冊　七大寺巡礼私記(1981)
第23冊　東大寺文書目録第四巻(1981)
第24冊　東大寺文書目録第五巻(1982)
第25冊　平城宮出土墨書土器集成I(1982)
第26冊　東大寺文書目録第六巻(1983)
第27冊　木器集成図録－近畿古代編－(1984)
第28冊　平城宮木簡四　図版・解説(1985)
第29冊　興福寺典籍文書目録第1巻(1985)
第30冊　山内清男考古資料I(1988)
第31冊　平城宮出土墨書土器集成II(1988)
第32冊　山内清男考古資料2(1989)
第33冊　山内清男考古資料3(1991)
第34冊　山内清男考古資料4(1991)
第35冊　山内清男考古資料5(1991)
第36冊　木器集成図録－近畿原始編－(1992)
第37冊　梵鐘実測図集成(上)(1992)
第38冊　梵鐘実測図集成(下)(1993)
第39冊　山内清男考古資料6(1993)
第40冊　山田寺出土建築部材集成(1994)
第41冊　平城京木簡一－長屋王家木簡－(1994)
第42冊　平城宮木簡五　図版・解説(1995)
第43冊　山内清男考古資料7(1995)
第44冊　興福寺典籍文書目録第2巻(1995)
第45冊　北浦定政関係資料(1996)

第46冊　山内清男考古資料 8（1996）
第47冊　北魏洛陽永寧寺（1997）
第48冊　発掘庭園資料（1997）
第49冊　山内清男考古資料 9（1997）
第50冊　山内清男考古資料10（1998）
第51冊　山内清男考古資料11（1999）
第52冊　地域文化財の保存修復　考え方と方法（1999）
第53冊　平城京木簡二－長屋王家木簡二－（2000）
第54冊　山内清男考古資料12（2000）
第55冊　法隆寺古絵図集（2001）
第56冊　法隆寺考古資料（2001）
第57冊　日中古代都城図録（2002）
第58冊　山内清男考古資料13（2002）
第59冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅲ（2002）
第60冊　平城京条坊総合地図（2002）
第61冊　鞏義黄冶唐三彩（2002）
第62冊　北浦定政関係資料　松の落ち葉（2002）
第63冊　平城宮木簡六　図版・解説（2003）
第64冊　平城京出土古代官銭集成Ⅰ（2003）
第65冊　北浦定政関係資料　松の落ち葉二（2003）
第66冊　山内清男考古資料14（2003）
第67冊　興福寺典籍文書目録第３巻（2003）
第68冊　古代東アジアの金属製容器Ⅰ中国編（2003）
第69冊　平城京漆紙文書一（2004）
第70冊　山内清男考古資料15（2004）
第71冊　古代東アジアの金属製容器Ⅱ
　　朝鮮・日本編（2004）
第72冊　畿内産暗文土師器関連資料Ⅰ　西日本編（2004）
第73冊　黄冶唐三彩窯の考古新発見（2005）
第74冊　山内清男考古資料16（2005）
第75冊　平城京木簡三－二条大路木簡一－（2005）
第76冊　評制下荷札木簡集成（2005）
第77冊　平城京出土陶硯集成Ⅰ（2005）
第78冊　黒草紙・新黒双紙（2006）
第79冊　飛鳥藤原京木簡一　図版・解説（2006）
　　－飛鳥池・山田寺木簡－
第80冊　平城京出土陶硯集成Ⅱ－平城京・寺院－（2006）
第81冊　高松塚古墳フォトマップ資料集（2008）
第82冊　飛鳥藤原京木簡二　図版・解説（2008）
　　－藤原京木簡一－
第83冊　興福寺典籍文書目録第四巻（2008）
第84冊　山内清男考古資料17（2008）

奈良文化財研究所基準資料

第１冊　瓦編１　解説（1973）
第２冊　瓦編２　解説（1974）
第３冊　瓦編３　解説（1975）
第４冊　瓦編４　解説（1976）
第５冊　瓦編５　解説（1976）
第６冊　瓦編６　解説（1978）
第７冊　瓦編７　解説（1979）
第８冊　瓦編８　解説（1980）
第９冊　瓦編９　解説（1983）

飛鳥資料館図録

第１冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏（1976）
第２冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文篇（1976）
第３冊　日本古代の墓誌（1977）
第４冊　日本古代の墓誌　銘文篇（1978）
第５冊　古代の誕生仏（1978）
第６冊　飛鳥時代の古墳（1979）
第７冊　日本古代の鴟尾（1980）
第８冊　山田寺展（1981）
第９冊　高松塚拾年－壁画保存の歩み－（1982）
第10冊　渡来人の寺－桧隈寺と坂田寺－（1983）
第11冊　飛鳥の水時計（1983）
第12冊　小建築の世界－埴輪から瓦塔まで－（1983）
第13冊　藤原宮－半世紀にわたる調査と研究－（1984）
第14冊　日本と韓国の塑像（1985）
第15冊　飛鳥寺（1985）
第16冊　飛鳥の石造物（1986）
第17冊　萬葉乃衣食住（1986）
第18冊　壬申の乱（1987）
第19冊　古墳を科学する（1988）
第20冊　聖徳太子の世界（1988）
第21冊　仏舎利埋納（1989）
第22冊　法隆寺金堂壁画飛天（1989）
第23冊　日本書紀を掘る（1990）
第24冊　飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察（1991）
第25冊　飛鳥の源流（1991）
第26冊　飛鳥の工房（1992）
第27冊　古代の形　飛鳥藤原の文様を追う（1994）

第28冊　蘇我三代(1995)
第29冊　斉明紀(1996)
第30冊　遺跡を測る(1997)
第31冊　それからの飛鳥(1998)
第32冊　UTAMAKURA(1998)
第33冊　幻のおおでら－百済大寺(1999)
第34冊　鏡を作る　海獣葡萄境を中心として（1999)
第35冊　あすかの石造物(2000)
第36冊　飛鳥池遺跡(2000)
第37冊　遺跡を探る(2001)
第38冊　'あすか－以前'(2002)
第39冊　Ａ０の記憶(2002)
第40冊　古年輪(2003)
第41冊　飛鳥の湯屋(2003)
第42冊　古代の梵鐘(2004)
第43冊　飛鳥の奥津城
　　－キトラ・カラト・マルコ・高松塚。(2004)
第44冊　東アジアの古代苑池(2005)
第45冊　キトラ古墳と発掘された壁画たち(2006)
第46冊　キトラ古墳壁画四神玄武(2007)
第47冊　奇偉荘厳　山田寺(2007)
第48冊　キトラ古墳壁画十二支－子・丑・寅－(2007)
第49冊　まぼろしの唐代精華
　　－黄冶唐三彩窯の考古新発見－(2008)

飛鳥資料館カタログ

第１冊　仏教伝来飛鳥への道(1975)
第２冊　飛鳥の寺院遺跡１－最近の出土品(1975)
第３冊　明日香の仏像(1978)
第４冊　桜井の仏像(1979)
第５冊　高取の仏像(1980)
第６冊　橿原の仏像(1981)
第７冊　飛鳥の王陵(1982)
第８冊　大官大寺－飛鳥最大の寺－(1985)
第９冊　高松塚の新研究(1992)
第10冊　飛鳥の一と－最近の調査から－(1994)
第11冊　山田寺(1997)
第12冊　山田寺東回廊再現（1997)
第13冊　飛鳥のイメージ(2001)
第14冊　古墳を飾る 音乗谷古墳の埴輪(2005)
第15冊　うずもれた古文書
　　－みやこの漆紙文書の世界－(2005)
第16冊　飛鳥の金工－海獣葡萄鏡の諸相－(2006)
第17冊　飛鳥の考古学2006(2006)
第18冊　「とき」を撮す－発掘調査と写真－(2007)
第19冊　飛鳥の考古学2007(2007)
第20冊　飛鳥の考古学2008(2008)

その他の刊行物（2008年度）

奈良文化財研究所紀要2008
奈文研ニュースNo.29
奈文研ニュースNo.30
奈文研ニュースNo.31
奈文研ニュースNo.32
埋蔵文化財ニュース134
埋蔵文化財ニュース135
埋蔵文化財ニュース136
埋蔵文化財ニュース137
平安時代庭園に関する研究２
－平成19年度古代庭園研究会報告書－
Hamlet Survey Report Duong Lam Village Ha Tay Province Sosialist Republic of Viet Nam
古代地方行政単位の成立と在地社会
遺跡情報交換標準の研究２
出雲大社境外社建造物調査報告書
遺跡の保存管理・公開活用と指定管理者制度
－平成19年度遺跡整備・活用研究集会（第２回）報告書－
金属工芸史の研究
地下の正倉院展－長屋王家木簡の世界－

※（　）内は発行年度

人事異動（2008.4.1～2009.3.31）

●2008年4月1日付け

副所長　山崎　信二
企画調整部長　小林　謙一
　兼・企画調整部写真室長
文化遺産部長　山中　敏史
都城発掘調査部長　松村　恵司
埋蔵文化財センター長　肥塚　隆保
　兼・埋蔵文化財センター年代学研究室長
管理部管理課長　仁木　俊二
管理部文化財情報課長　平石　憲良
管理部管理課課長補佐（兼）庶務係長　廣中　保彦
管理部管理課課長補佐　清水　尚
管理部業務課施設係長　志野愛由美
管理部管理課庶務係　井手　真二
管理部管理課用度係　大村　尚江
管理部業務課研修・事業係　三本松俊徳
企画調整部企画調整室長　小池　伸彦
文化遺産部歴史研究室長　吉川　聡
文化遺産部遺跡整備研究室長　平澤　毅
都城発掘調査部考古第一研究室長　難波　洋三
埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長　高妻　洋成
文化遺産部主任研究員　清水　重敦
都城発掘調査部主任研究員　山本　崇
都城発掘調査部主任研究員　箱崎　和久
都城発掘調査部主任研究員　市　大樹
都城発掘調査部主任研究員　降幡　順子
　兼・埋蔵文化財センター保存修復科学研究室
埋蔵文化財センター主任研究員　金田　明大
埋蔵文化財センター主任研究員　大河内隆之
文化遺産部遺跡整備研究室　粟野　隆
都城発掘調査部考古第一研究室　国武　貞克
都城発掘調査部考古第一研究室　廣瀬　覚
都城発掘調査部考古第一研究室　青木　敬
都城発掘調査部遺構研究室　高橋知奈津
埋蔵文化財センター環境考古学研究室　山﨑　健
都城発掘調査部考古第二研究室任期付研究員　加藤　雅士
都城発掘調査部考古第一研究室特別研究員　木村　理恵
都城発掘調査部考古第二研究室特別研究員　若杉　智宏
文化庁文化財部付　金井　健
大阪教育大学管理部経理課長　石坪　辰男
奈良工業高等専門学校事務部長　山田　耕一
京都大学人間・環境学研究科専門員　藤田　徹
京都大学医学部附属病院経営管理課専門員　山本　博
京都大学施設環境部施設活用課専門職員　久保　慶史
京都大学総務部人事企画課　延原　由紀

●2008年9月1日付け

埋蔵文化財センター保存修復科学研究室特別研究員　辻本與志一

●2008年10月1日付け

都城発掘調査部遺構研究室　鈴木　智大
都城発掘調査部史料研究室特別研究員　井上　幸

●2009年2月16日付け

企画調整部任期付研究員　成田　聖
都城発掘調査部任期付研究員　加藤　雅士

●2009年3月31日付け

定年退職　山崎　信二
定年退職　西村　博美
定年退職　小林　謙一
定年退職　山中　敏史
定年退職　千田　剛道
定年退職　西口　壽生
定年退職　飯田　信男
辞職　窪寺　茂
辞職　市　大樹
辞職　関廣　尚世

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2008年度	2009年度（予定額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	971,548	962,102
施設整備費	0	146,800
自己収入（入場料等）	29,332	29,625
計	1,000,880	1,138,527

土地と建物

単位：m^2

	土地	建物（建面積／延面積）	建築年
本館地区	8,860.13	2,754.25/6,754.86	1964年他
平城宮跡資料館地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年他
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	20,515.03	6016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費補助金（2009年4月6日現在）

単位：千円

研究種目	2008年度		（参考）2009年度	
	件数	金額	件数	金額
基盤研究（S）	1	37,310	1	20,020
基盤研究（A）	4	38,480	3	47,580
基盤研究（B）	6	22,880	4	16,380
基盤研究（C）	7	9,880	7	9,230
若手研究（B）	16	20,436	18	23,010
若手研究（スタートアップ）	3	4,264	2	3,107
特別研究員奨励費	1	1,100	1	1,100

受託調査研究

単位：千円

区分	2007年度		2008年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	17	71,973	14	40,283
発掘	10	27,460	6	53,865
計	27	99,433	20	94,148

職員一覧

- **奈良文化財研究所長** 田辺征夫
  - **副所長** 肥塚隆保
  - **管理部長** 多　昭彦
    - **管理課長** 仁木俊二
      - **課長補佐** 廣中保彦／清水　尚
        - **庶務係長** (兼)廣中保彦
          - **係員** 井手真二
        - **会計係長** 江川　正
        - **用度係長** 柳生弘和
          - **係員** 大村尚江
        - **専門職員** 松本正典
      - **事務補佐員** 大西和子／岩永恵子／新宮恵子／松森左千子
      - **事務補佐員** 井野由宜子／山口由佳
      - **事務補佐員** 港　悦子／幸田恵里子／(育) 竹田恵美
    - **業務課長** 東　博信
      - **課長補佐** 今西康益
        - **研修・事業係長** 石田義則
          - **係員** 三本松俊徳
        - **施設係長** 志野愛由美
        - **再雇用職員** 飯田信男
      - **事務補佐員** 永井和代
      - **本部事務局　環境整備室** (併)今西康益　志野愛由美
    - **文化財情報課長** 平石憲良
      - **課長補佐** 永井あつ子
        - **普及・資料係長** 桑原隆佳
        - **図書・情報係長** 太田　仁
        - **専門職員** 車井俊也
      - **事務補佐員** 岡本倫子／内海真理
      - **事務補佐員** 伊藤久美／上野文絵
  - **企画調整部長** (兼)肥塚隆保
    - **企画調整室長** 小池伸彦
    - **文化財情報研究室長** 森本　晋
    - **国際遺跡研究室長** 杉山　洋／(兼)森本　晋
      - 石村　智
      - **東文研　文化遺産国際協力センター** (併)杉山　洋／森本　晋／石村　智
    - **展示企画室長** (兼)杉山　洋
      - (育)西田紀子　丹羽崇史
      - **任期付研究員** 成田　聖
    - **写真室長** (兼)肥塚隆保
      - **専門職員** [藤]井上直夫
      - **専門職員** 牛嶋　茂 — **主任** 中村一郎
      - **技能補佐員** [藤]岡田　愛
      - **技能補佐員** 鎌倉　綾
    - **主任研究員** 加藤真二
  - **文化遺産部長** 小野健吉
    - **歴史研究室長** 吉川　聡
    - **建造物研究室長** 島田敏男
    - **景観研究室長** 清水重敦
      - 惠谷浩子
    - **遺跡整備研究室長** 平澤　毅
      - 粟野　隆
  - **都城発掘調査部長** (担)[平]井上和人
    - **副部長** (担)[藤]深澤芳樹
    - **考古第一研究室長** [平]難波洋三
      - [平]国武貞克／芝康次郎
      - [藤]廣瀬　覚／青木　敬
      - **特別研究員** [藤]木村理恵
    - **考古第二研究室長** [藤]玉田芳英
      - [平]神野　恵／森川　実／城倉正祥
      - [藤]小田裕樹
      - **特別研究員** [藤]若杉智宏
    - **考古第三研究室長** [藤]次山　淳
      - [平]林　正憲／森先一貴
      - [藤](育)中川あや／高田貫太
      - **特別研究員** [藤]石田由紀子
      - **任期付研究員** [藤]加藤雅士
      - **特別研究員** [平]古藤真平　井上　幸
    - **史料研究室長** [平]渡邉晃宏
      - [平]浅野啓介
    - **遺構研究室長** [平]箱崎和久
      - [平]大林　潤／鈴木智大
      - [藤]黒坂貴裕／番　光／高橋知奈津
    - **主任研究員** [平]今井晃樹／馬場　基／[藤]降幡順子／豊島直博／山本　崇
    - **専門職員** (兼)[藤]松本正典
    - ※[平]は平城地区を示す。[藤]は飛鳥・藤原地区を示す。(担)は地区担当を示す。(育)は育児休業中。(兼)は兼務を示す。(併)は併任を示す。
    - **事務補佐員** [藤]吉岡佐和子
    - **技能補佐員** [藤]木寅貢志／山田昇司
  - **埋蔵文化財センター長** 松井　章
    - **保存修復科学研究室長** 高妻洋成／(兼)降幡順子
      - 脇谷草一郎
      - **特別研究員** 辻本與志一
      - **東文研　保存修復科学センター** (併)高妻洋成　降幡順子　脇谷草一郎
    - **環境考古学研究室長** (兼)松井　章
      - 山崎　健
    - **年代学研究室長** 大河内隆之
    - **遺跡・調査技術研究室長** 小澤　毅
    - **主任研究員** 金田明大
  - **飛鳥資料館長** (兼)田辺征夫
    - **学芸室長** (兼)加藤真二
      - (兼)(育)西田紀子／(兼)丹羽崇史
      - (兼)**任期付研究員** 成田　聖
    - **専門職員** (兼)車井俊也
    - **事務補佐員** 大谷照子　米川まち子　辻本あらた

2009.4.1 現在